每月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年二月二十五日發兌

第七拾貳號

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味掛きものなり之れには彼

スコット乳菓の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるが最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富む事は他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ひて奇効を見べし

殊に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身體となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰痩にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益することと實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

Location	Name
横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田濟右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

新刊 少年傳記叢書 第二冊

兩ケトー

定價十二錢 郵税二錢

兩ケトーとは老ケトー及び少ケトーのことなり◎共に羅馬古代の英傑なり◎シピオ、シーザルの大功業なき代りには又其大野心なく却て高潔の志氣あり剛毅の品行あり義を直視して直行する大信念あり◎一生驕奢の流弊と戰ひ、專制と戰ひ、自由の爲めに戰ひ、老至りて愈ゝ猛、困厄迫りて益ゝ烈、千歳の下なほ其言行の能く人を動かすありとは此種の人物なり◎材料も行文も專らプルタークの列傳に由る◎プルタークの列傳は全歐洲雲の如き英雄の源泉なるを思へば、本書の眞味自から此にあるは言はずと明か◎今や羅馬なし、大日本あり、大日本の大を思はんものは古羅馬を視よ、古羅馬を視んと欲するものは古英傑を觀よ

少年傳記叢書 第一冊 フランクリンの少壯時代

定價拾貳錢 郵税貳錢

●●●●●早稻田文學評 十二文豪あり、社會叢書あり、青年叢書あり、家庭叢書あり、而して今また少年傳記叢書を出だす、民友社が社會のために盡くすの念厚きは世の認むる所なるべし、本書は即ち其の第一の卷なり、紙鳶によりて電氣を撿せし人として、はた自叙傳の著者として、フランクリンの名は何人の耳にも熟せり、其の誕生より結婚に至るまでの經歷を細叙せるは即ち此の書にして、幾たび讀みかへしても一種の趣味あるは此の類の書なるべし、少年立志の栞となすに足る、

●●●●●經濟雜誌評 少年傳記叢書の第一卷として此書は出でたり、文章平易にして挿畫あり、フランクリンは人の模範たるべき人なり、民友社が此人の傳記を少年傳記叢書の第一卷としたるは偶然にあらず、

●●●●●福音新報評 右は少年傳記叢書の第一冊なり其主人公たるベンヂヤミン、フランクリンは勞力を以て生活に資するより身を起し米國獨立の際に方りては議政堂に立ちて建國の大策を講じ四方に使ひして其任命を全うし科學上の試驗を爲しては天下の知識を開拓するに與り常識に基ける處世の訓言を遺して後進を益すると頗る多し彼は合衆國の人民の氣風を養成するに於て最も有力なる要素にてありき本書平易簡明に其傳記を叙したれば空論に馳せて實務を忘却せんとする今日の少年を益すると尠からざるべし。

發兌元 東京市京橋區日吉町 民友社

徳富猪一郎著

國民叢書第九冊 家庭小訓

定價拾貳錢
郵税　貳錢

「日本」の評　著者蘇峰子の實驗より得たるものを平易に書き流したる小冊子なり子の理想にあらずと雖も子の理想亦以て覗ふに足るべし

「日々」の評　徳富蘇峰氏近業中家庭に係る小品を蒐錄して一篇となすもの箏々玉の如く藹然たる深情を含む別に經營慘憺の迹なきも其の實益の點に至りては他の切齒扼腕的文章の比にあらざるべし

「經濟雜誌」の評　著者の自白する如く本書は分りきつたる事を說き出したるものなれども、迺がは蘇峯氏の文たけありて趣味津々として紙上に溢れ、覺えず卷を終らしむ、古語に曰く、日光が水晶を透過して五色の光彩を放つが如く、尋常茶飯の事柄も天才の錦心繡腸を透過するときは異彩を生ずと、余輩は本書に於て此語の欺かざるを見る、

「早稻田文學」　徳富蘇峯氏が小引の意にいはく「世には其の言ふ所、匹夫匹婦も合點するも、大人豪傑すら之を行ひ得る難き事有之候、本書說く所の如き或はその一斑かと存候、斯る意見は其の議論よりも寧ろ論者の如何によりて價値は定まるものにて候、著者が江湖の君子に向て一讀の勞を要請するは自から言ふ所を能く實行する程は參らざるも、聊か自から行はんと欲する所なるが故に候」と、以て此の書の價値と性質とを知るべし、家庭の細大を三十六項に分かちて槩說せり、「美はしき家風」の條下に、「若し夫れ一家の異分子に到りては無きに若くなし、即ち食客、厄介者等の如きは成る可く居らぬに增す事なし」などいへる所、著者の家風を想ひ見るべし、「夏の樂み」の章など、詩趣また味ふに足れり

國民叢書	三版	進歩乎退歩乎	定價拾錢	郵税二錢
國民叢書	六版	人物管見	定價拾五錢	郵税四錢
國民叢書	七版	青年と教育	定價拾五錢	郵税四錢
國民叢書	十三版	靜思餘錄	定價拾五錢	郵税四錢
國民叢書	八版	文學斷片	定價拾五錢	郵税四錢
國民叢書	六版	天然と人	定價二拾錢	郵税四錢
國民叢書	五版	第二靜思餘錄	定價拾錢	郵税二錢
國民叢書	四版	風雲漫錄	定價拾五錢	郵税四錢

明治廿九年二月廿五日發行
家庭雜誌第七拾貳號

目錄


鳳仙良埣画

家庭雜誌第七拾貳號
（明治廿九年二月廿五日發兌）

社説

家庭敎育の近道

誰れの家にも、父あり、母あり、祖父あり、祖母あり、曾祖父あり、曾祖母あり。

既に然れば必らず其の父祖に關する歴史ある可き筈なり。その歴史中には、必らず其の父祖の嘉言善行ある可き筈なり。

家庭敎育の要は、其の兒童をして、父祖の嘉言善行を知らしむるより手近きはなし。

若し國民を敎育するに、國家の歴史、特に歴史中の大人豪傑の事實を大切なりとせば、家庭敎育に於て、一家の歴史、特に其の父祖の嘉言善行を知らしむるの大切なる、亦た知る可きのみ。

例せば吾々が楠正成、加藤清正、和氣清麿、源義經の事歴を聞きて、其の心の躍り、其の情の動くや、何となく慕はしく、何となく愛らしく、何となく樂く、之を思ひ之を想へば、何時かは吾々も此等の大人豪傑の如き心地になるものぞかし。人は理窟にのみ動くものかは。

吾々の祖先の中に、若し功名手柄を顯はしたる人あらん乎。若し國家の爲めに、力を竭したる人あらん乎。或は鄕黨隣里の爲めに、慈善の行をなしたる人あらん乎。或は勤儉、力行、身を立て、家を興したる人あらん乎。

その祖先の事歴を、詳かに、悉しく、明らかに其の子弟、兒童に知らしむるは、實に其の子弟、兒童たるものをして、身を立て、行を高ふし、立派なる人物たらしむる、第一着歩と知らずや。

支那人の事よりも、我が國人の事が手近し、國人の事



よりも、我が祖先の事は、別して手近し。手近ければ、

其の子弟、兒童を感發興起せしむるもの、最も妙なり。

或は曰く斯る先祖あれば、最も妙なれども、誰人の家にも、必らず斯る大人豪傑ありとも限るまじ。然る時には其の詮すべなきにあらずやと。是れ甚だ不通の論也。

孔子も十室の邑、忠信丘が如きものあらんと曰ひぬ。如何なる家にも、無名の英雄あるぞかし。既に家あれば、家を起したる人あり、既に家族あれば、家族の主となる人あり。其の正直に、健全に、甲斐〴〵しき履歴は、縦令偉大なる事功なきにせよ、其の高潔なる、人をして感發興起せしむるものなくんばあらず。

或は父祖の肖像、若しくは其の手蹟抔を、室内に装置し、時としては先祖祭を行ひ、一家打寄りて先祖の遺德を紀念する抔は、別して家風を淳良ならしめ、家庭を健全ならしむる所以にして、獨り兒童の敎育のみに

は止らじ。
國に歴史なければ、國は滅び、家に歴史なければ家は振はず。
家庭教育の道、豈に遠きにあらんや。

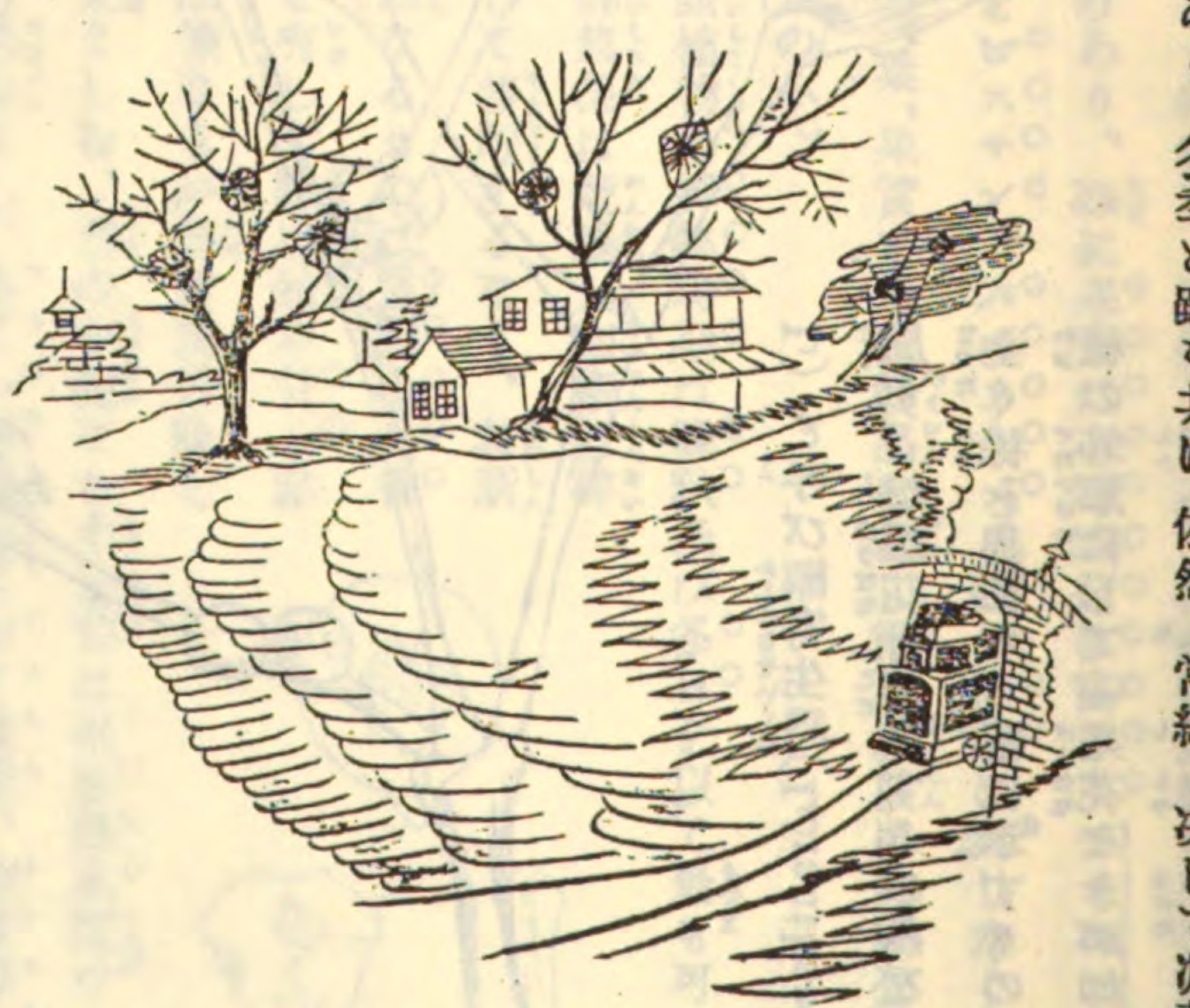
科學

枯木の緑園

理學士　市村塘

天空雪を飛ばし、寒風鬢を拂ふ今日此頃、草木みな凋萎し、獨り松杉得意顔なり、かゝる景色を眺めつゝ學習院前より堀邊を傳ひ牛込見付迄逍遙する間には、必ず彼岸堤上に並列せる枯れたる如き榎樹の枝梢、處々點々緑團の着生するあるを見ん、是果して何物なるやに就て、先つ世の母たるものに紹介しおき、以て其見に對する返答に躊躇せしめざらんと欲す。

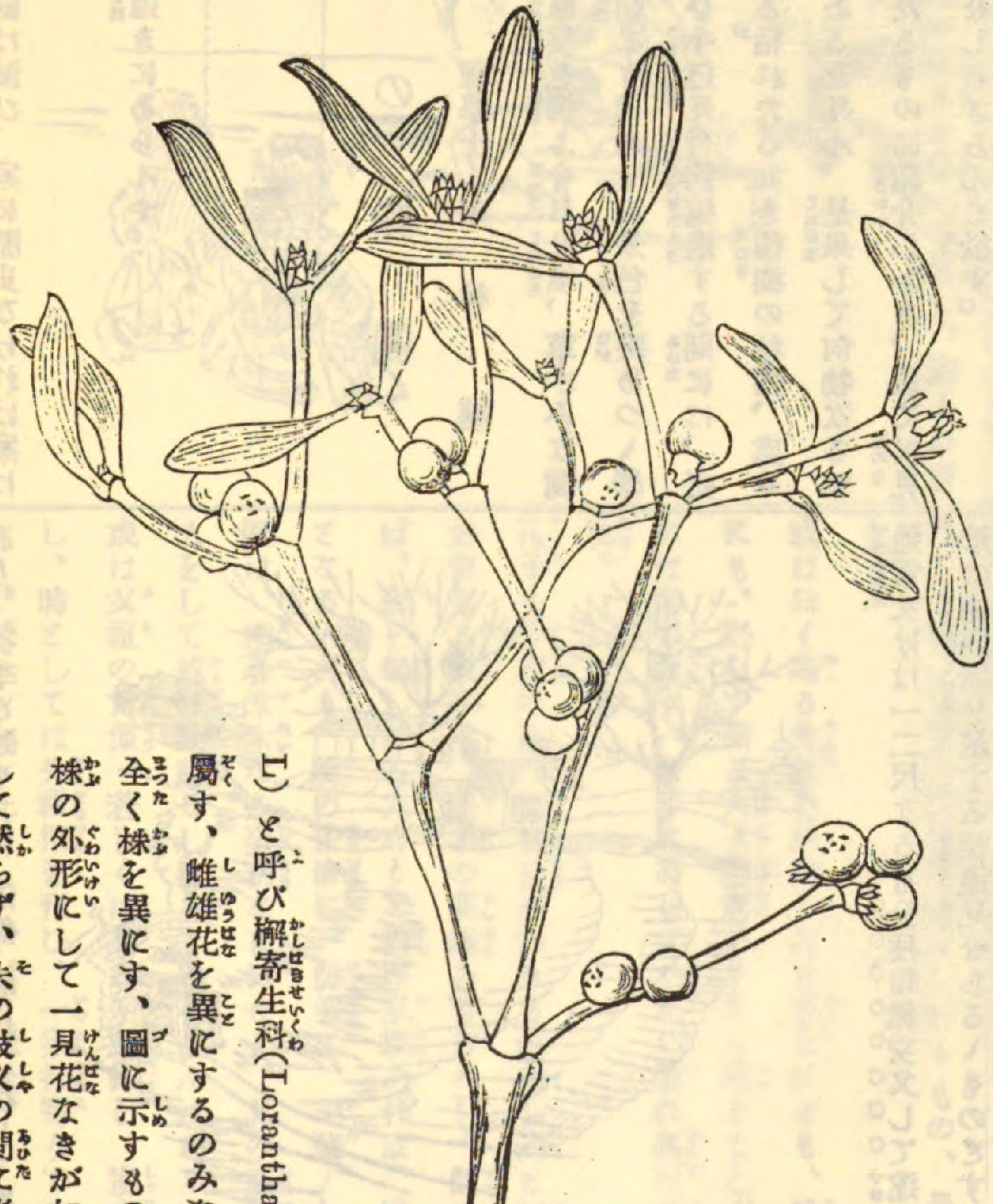
試みに其一緑團を突き落して熟覽するに、莖あり、葉あり、冬季と雖も共に、依然、常緑、決して凋萎せず、



朴樹に寄生するやどりぎ

通常丈けは一二尺なるも分枝錯雜交叉して遂に多少球形の緑團狀を呈する樣遙見せらるゝものとす、吾人今

指にて其葉莖を壓縮すればぶく〱して恰も革皮に觸るゝの感あり、是實に花を開くところの高等なる顯花植物なれども、自ら獨立して生活を營む能はず、專ら寄生的に吸根を親樹の皮下に播布し、親樹の食物を横奪して得々たるものなり、親樹必ずしも榎樹に限らず栗、槲、菩提樹、松、樺、林檎、などにも屢々寄生す、其名をやどりき（Viscūm album, L）と呼び槲寄生科（Loranthaceae）に屬す、雌雄花を異にするのみならず、全く株を異にす、圖に示すものは其雌株の外形にして一見花なきが如きも決して然らず、夫の枝叉の間に嫩芽の觀を呈するもの即ち是なり、大抵一叉に數花簇生し、各



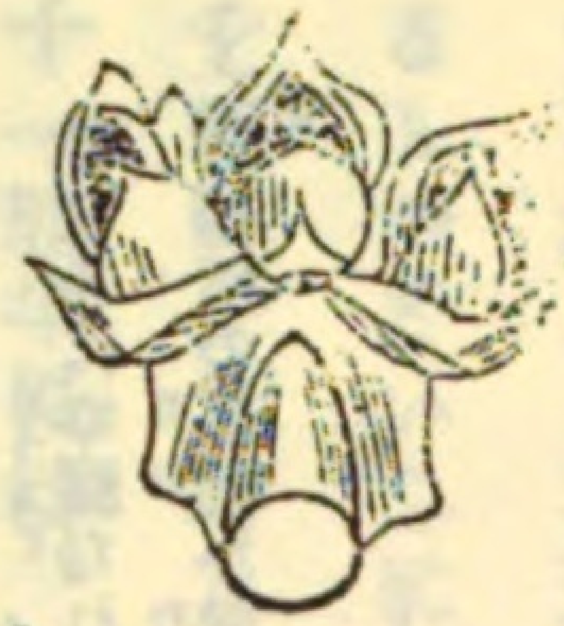
やどりぎの雌株

花に四片の花蓋あり、內方にある一箇の子房は受胎後漸く肉質を帯び、球狀の漿果を結び內に只一種子を藏む、其上面にある五箇の痕跡は柱頭と花蓋四片の付着點に相違なし。



やどりきの雌花

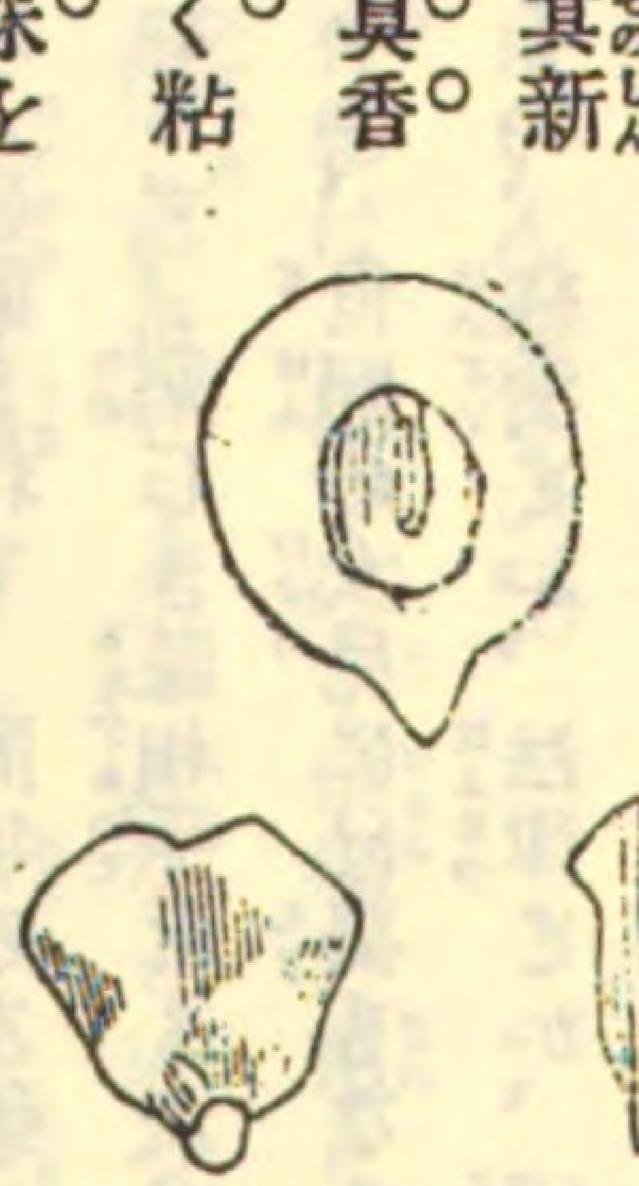
雄花は異株にあり、花蓋片數雄花と同しきも、多少內方に彎曲せると黄綠色を呈するを以て異りとす、然れども其內部には數多の葯房ありて花粉を吐出すは顯著なり。



やどりきの雄花

やどりきの化學的成分はウシクレル氏に由れば主として脂肪油、護謨質、ウスチン、砂糖を含み其他少量の加利鹽類、苦味質、澱粉、五培子酸をも存すといふ、又ガスパルド氏の報告にはウスチン、綠色素、砂糖、護謨、含硫黄蛋白質、樹脂等を揭げあり、殊に果實は有毒成分に富めりヘンリー氏は之をビスチン、パスソリン、蠟、護謨に歸したり、元來莖、葉、果實ともに藥品に供し得る所以は此成分あるが爲のみ。

該植物の採集時期は晩秋及び冬日を以て最も可とす、採集後は乾燥し切斷粉碎して蓄貯するなり、其新鮮なるものは强劇の臭香を有し、味は始め甘く粘液樣なるが後苛辣苦味を覺えしむ、莖の中髓なる木質部は無味無臭隨つて藥用の成分なし、嘗て一時獨逸に於て癲癇、痙攣等の腦脊髓病に大效ありといふので重用せられたるとあり、專ら浸藥或は煎藥なりしが今や大に墜落の有樣なりとい



やどりきの漿果

ふ。

◉下婢と子守　夫婦暮しに子供一人か二人ある家庭にては下婢を雇ふよりも子守を用ゆるかた大きに經濟なり細君が子守をするは小供のために幸福なれど下婢に臺所を打任せては損多し子守を雇ふて細君臺所の事務を執掌するこそよけれ

家談

愛らしき女王

黄花

和蘭國は處々に數多の殖民地を有して、其領地は日耳曼帝國の二倍に及ぶ程なれども、本國は誠に小さく、人口は僅か東京の二倍餘に過ぎず。斯る小さき國にはまた小さき女王ありて、小さき位に立つなり。

此愛らしき女王名をヰルヘルミナ、ヘレナ、ポーリナ、マリア、といふ。父ヰリアム三世、今を距る五年前世をさりたれば、彼女十歳にして父の後をうけ、母攝政となりて國政を掌りぬ。人もし此愛らしき女王に向ひで、女王の位は面白きものなりやと問ふ者あらば、何の猶豫もなく必否々と答ふるなるべし。そはかゝる高貴の位にあれば常に大人に圍まれて、同年の友達も得



易からず、樂しき遊相手をもたざるのみか、世間の女兒には要もなき憲法とか、經濟とか、法律とか、國王の責任とかいろ／＼の面倒なる事を勉强せしめらるゝ故なり。女王數多人形をもてるが中に、殊にめでたき一の人形あり。此は、「人形國の女王樣」と呼びて、常に女王の服をきせ、いと小さき寶椅に坐らせ、其他の人形にはそれ／＼大臣女官庶民の服をきせて女王の前にならべ、行く／＼は實際にすべき「王さんごつこ」を遊びになしぬ。或時女王外に出でしに、人民皆萬歳を呼びて、女王は頸の

骨もいたくなるばかり一々點頭しけるが、宮中に歸るとすぐ人形箱より彼の「女王」を取り出し、蠟附の頸のはなるゝまで幾度も〳〵點頭かせ、人形に向ひていはれけるは「さあ如何ですか、車にのつて、背骨のいたくなるほど御辭儀して御覽なさい、女王なんかはモウいや〳〵になつてしまいませうがね」と。

愛らしき女王は實に愛らしき女王なり。色白く、茶褐色の髮フサ〳〵波うち、綠の眼いと快活に、慓輕なる質眉目の間に見ゆ。語學も中々達者にて、猶十五の少女ながら、早五ヶ國語をよくす。日々如何にして暮さるゝやといふに、毎朝何時も七時に起き、八時に朝飯を終へ、九時より課業始まり、有名なる學者來り敎ふ。十一時半には、車にのり外に出で、然る後母太后と食事をすまし、共に運動をなし、歸りてまた四時まで勉强す。四時半には茶菓のもてなしあり、これより六時半の夕食までは庭に散歩するとも小馬に乘るとも人形と遊ぶとも隨意にて十時には必寐につく。斯く愛らしき快活なる女王なれど流石に威嚴といふ事は忘れで、場合によりては隨分屹とかまへらるゝ事もあり。十歳の頃王位に上りて未だ半年もたゝぬ程の事なりき、或朝猶暗き中に、母太后の寢室の戶をほと〳〵叩く者あり。太后「誰ぞ?」と問ひければ、可愛らしき聲「和蘭の女王」と答へぬ。母太后は打笑ひ「ホヽ、和蘭の女王陛下をお迎へ申すにはまだ時が早すぎますが、私しの井ルヘルミナならおはいんなさい」。

此小さき女王の誕生日には、臣下の子供等を招きてさま〳〵の饗應あり、湖に舟をうかべるなどいろ〳〵のあそびあり。女王は六匹の馬を有し、小さき車を引かせて、自ら御する事甚だ妙なり。又愛犬あり、スウエルといふ。常に主人をはなれず。夜は室外の番兵となり、勉强のときは門に待ち、儀式の行幸にも、瑞西の避暑にも必從ひ行く。車に御陪乘するときなど、

初は車にのせんとしても一向乘らず、車動き出せば後よりピラリト飛びのるなど、隨分無作法なる侍從殿なり。和蘭は一躰に豐饒なる國にて、王と人民との間よほど近く、如何なるものにても相應の手數を經れば、太后に面會自由なり。離宮の數多き中に、ヘツトルーの宮殿は夏涼く、犬、鳥、白鳥などいろ〳〵飼ひありて田舍めき、女王の最好まる丶處なり。此處に小さき別亭あり。此は女王の遊場にして、幼き時よりの玩弄物をおさめ、殊に三十の人形は行儀正しくならべられ、多年毎日之に學



課をさづけ居られたれば此頃はよほど學者になりつらん。此處はまた女王の家政あそび場にて女王自らパンをやき茶を入れ、母太后及貴女兩三人を招きて馳走せらる。此別亭の傍に、女王手づから草花など植へらる丶美しき花園あり。又其傍に畠ありて、女王おり〳〵鍬鋤をとりて野菜をつくる。和蘭人は一躰に農事を好めば、女王も自然之を好むなるべし。實に女王は一農家の主婦としてもよき女兒なり。まだ定年に達せざれば、政は專ら攝政太后の手にあれども、女王もいろ〳〵の儀式に出で丶振舞に申分なく、また中々愛國者にて和蘭ほどよき國はなく、和蘭人民ほど忠良なる民なしと思へり。母太后は和蘭人ならざれど、女王は母と語るにも必らず國語を用ひ、また好むで百姓の服を着けらる丶なり。和蘭百姓の衣服は甚だ趣味あるものなり。

此愛らしき女王、去年の八月滿十五となりぬ。和蘭人

は共和主義の民たるも深く此愛らしき女王を愛し、「我等の小さき女王」と呼び之を視る猶吾愛女を見る如く、指を屈して其成長を待ち居れり。

◎赤兒の痩せかた　は時々左右に代ゆべし一方へのみ偏して寢かす時は頭部の變形又は首を屈曲する患あり、知れる人に此患に罹りしものあり、自身すら小學生徒となり體操をせし時、首の運動自在ならざるより始めて小兒の折、母親の不注意より不具となりしを悟りし、心をつくべき事なり

文藝

醫學士

溪水生

其一

嚴めしき門より、連なる、敷石を傳ふて、遙かに硝子障子もて鎖せる、玄關が見ゆる。玆は誰の住居であろふ?。試みに門の右の柱にかけたる、新しき名札を見れば、船山敬藏の四字が、墨の痕も鮮やかに讀まれる、偖ては、先頃獨逸より歸朝して、某伯の令孃を娶つたと聞いた、醫學士船山敬藏が住居とは知られた。玄關を上れば、直ぐに書生部室である。此處を踏切つて行けば、一番先きの八疊の間が主人の書齋である。正面は床の間で、直き其横の書棚には、醫書と覺しく澤山な金字入の洋書が、正しく飾られてある。丸窓の下は即ち彼の坐所で、庭に向ふた一方の障子のすつかり開放されてあるのは、絶へず新鮮なる空氣を通はせる爲と知られた。頃しも夏の事とて、庭園の眺めは又一入である。一面築山と築山との間に細長き泉水を穿ち怪巖奇石を程能く据へ付けて、迂曲と曲つた松の岩が根を敝ふて、次第に泉水に差懸つて居る具合。若し一度篠を亂したらん如き白雨の降止んだ後、凉風松々枝を渡つて、絞る雫のほと〳〵と、平かなる水の面に色々の渦紋を織り出す時なぞは、何とも言へない好景

色である。今しも主人は机に依りて、捲烟草を燻らし乍ら、庭の景色には目も呉れず、眼鏡越しに餘念なく新聞紙を見詰めて居る。一寸見た所で、彼は三十前後と見へる。浴後と覺しく身には浴衣を着けて、其上より白縮緬の兵兒帶を捲いて居る。彼の容貌は慥かに、彼の性質を寫し出して居る。一層廣き彼の額は、豐裕なる思想を有する事を證するに餘りあり。秀でたる眉の下より異樣の鋭き光の眼鏡を透して輝く彼の眼は、鋭利なる觀察力と明快なる理會力とを兼備へて居るのを充分に示す。彼の引絞つたる唇は駄洒落を以て婦女子を喜ばす風流才子の內に、敢て見



ざる所である。彼は今迄一言も發しなかつた。然し時々フ、ン中々ひどい益猖獗だと片々の語が、彼の唇より僅に洩れて居る。彼はやがて新聞紙を傍へに置き冥目して暫し深き思ひに沈んだが、又やがて、徐ろに眼を開ひて、長き吐息を洩らした。彼は消し烟草に心付ひて、火を點じた、稍ありて彼は何か决心の模樣で、含みし烟を輪に吹き乍ら、やほら獨語つゝ始めた。

「行かふ〳〵。一つ行つて研究して見よふ。斯ふやつて毎日の樣に、新聞に出て居るのを見れば、實に夥多しい死人だ。そして益蔓延しそふな傾向がある。余程の劇症と見へるな…何れ黴菌の作用と思はれるが然し先づ醫學上の一疑問だ。夫にしては、澤山の醫學者が居り乍ら、何故一人も研究に行く者は無いんだろふ。彼等はム、成程傳染を恐れて居るんだな。傳染隨分恐る可しだ。時に依ては避けんければならん。然し苟も醫學の進歩を計ろふと思ふ以上は、是位の事に懸念する樣では、到底出來ない。今の醫學者は、抑誤つて居る。彼等は餘りに利己的だ。己の利益許りを計つて居て、醫學と言ふ事には少しも心掛ない。自分はどふも、彼等の心が分らん。彼等は醫學を研究する爲に醫學を學ぶのではなくつて、生活の元素として、醫學を學んで居る。彼等が傳染を恐るゝのも尤だ。死を恐るゝのも尤だ。彼等は彼等の天職を知らない。彼等は醫學で食ふてさい行けば、我事終れりとして居る。醫學はこんな狹い卑いものでない、有ゆる病症を研究し、治療して、人類社會の禍を除く、重大なる、神聖なる、學術である。我々は天職として醫學の爲に盡さんければならぬ。黒死病の發生は、我々の天職を盡すべき爲の天の與へだ。そふ〳〵。自分は最早决心した。一命を抛つて研究するんだ。生きて歸れば此上はないんだけれど、死んだら死んだ迄さ。兵士が戰場に屍を洒すのも、自分が黒死病の爲に一命を殞すのも、

天職の二字に於ては同じ事だ。假令死んでも、研究の結果が、醫學の進步に幾分の影響を及ぼし、醫學社會に幾分の稗益を與ふるを得ば、實に本望だ。

蹙めた眉は稍開ひた。彼は靜に庭園を見下した。日は早や西山の端に傾きしと覺しく、曲つた庭の松影を長く引延べた。榮へし松ヶ枝に小波打たせて、輕く水面を掠めて吹來る涼風は、柔かに敬藏が浴衣を透して、ひやりと肌に迫つた。彼は快然一笑して、「やあ心迄涼しくなつた」。

折しも後ろの襖を開ひて、靜かに這入つたのは、花の如き花嫁由利子であつた。敬藏はやほら振向ひた。由利子は羞かしげに俯向ひた。そして言つた「我夫御膳召上りませんか」。

其　貳

翌日敬藏は內務省に、黑死病原研究の爲、香港渡航の事を願ひ出でた。內務大臣は其志を嘉して、之を許可した。即刻彼は、親戚知人を招待して、盛んに離別の宴を開ひた。

偖て其翌日は、愈午後の滊車で出立する事に極つたので、早朝から中々の混雜である。今しも玄關口の書生部室には、二人の書生が居る。洋服を着けた一人の書生は、取散らした諸道具を忙はしく仕まつて、脹れ切つた支那革囊と蝙蝠傘と帽子とを片寄せ、漸く支度を終りしと見へて、机によりて烟草を燻らし居たる、他の一人の書生の前に坐つた。「漸く準備が出來た。君是れから行つてくるぜ。跡は宜敷。是はしたり、僕は居候だつたつけ。アハ〻「フヽンい〻氣味さ、すつかり向飯で洋行するなんて、果報極る。僕なんか眞實に馬鹿げた話さ。「餘り果報者でもあるまいさ。四角張つた先生に隨行する丈でも堪らないのに、一度煩へば生きる事はむつかしい、黑死病なんか忌はしい中に行くなんて、ほんの義務さ。「でも行かないよりはい〻んだ

ろふ。「僕は君の境遇が羨ましいねへ。なぜ。「なぜなんて、よくまあ、濟して居るんだねへ。若い女許りの中に眞實に羨ましいぢやないか。「大概に嘲弄のがいゝぜ。若ひ女だつて內の奧樣中々威嚴があるぜ。「然し餘程の別嬪だ。エー結婚後まだ一月許りしか經たんだろふ。夫じや所謂ホチームーンと言ふ所だな、僕ならこゝらで、結婚旅行とでも企つる筈だが……先生も先生だ。花の蕾を捨てゝ行くなんて、余程の情なしと見へるな

「いやそふでない、君も知つて居るだらふが、御夫婦の中は鴛鴦も及ばん程だつたつけ、此度の先生の企も無理はないんだけれど、僕は奧樣が可愛相だ。「可愛けりやたんと可愛がつて上げるがいゝさ。「又人を馬鹿にしているんだなあ。

折しも後ろの障子を周章しく開ひた音に、二人は振向ひた。見れば召使のお竹であつた。彼は顔だけ半分出して、突然に、「樫田さん、御用意は……もふ直ですよ

と手短かに言つた。洋裝の書生樫田は、「はい宜しい」と是も同じく手短かに言つた。

やがて、澤山の足音と共に、敬藏は旅裝の洋服で、帽子と傘との外、小さな提革嚢を携へて、悠々と入つて來た、其前後には明友親戚五六名が伴れだつて、其後には、妻君と下女とが從つて居た。樫田は荷物を取つて從ふた。今一人の書生杉山も同じく立つた。玄關には、早や數挺の車が待つて居るのである。敬藏と樫田と數名の人々は、やほら車に乘移つた。由利子は今迄羞かしげに、始終後に佇立で居たが、最早躊躇すべき時でない。彼女は思切つて、「我夫御健康で……早くお歸り」と言つたが、其儘俯向ひた。然し彼に取つては此一言が赤心をこめた、勢一杯の挨拶であつた。敬藏は「左樣なら行つてくるから跡を宜敷」と、彼も流石は名殘を惜んだが、人目を憚つて、そんな素振は少しも見せなかつた。車は楫を廻した。由利子が漸く顏を

擧げた時は、車は早や門を出た跡であつた。彼女は俄かに名殘惜げに、急ひで門の際まで行つた時は、影は早や其處の先の角で消へて轍の音のみ幽かに聞へて居つた。

＊　＊　＊　＊　＊

敬藏が香港に行つた後は、花嫁由利子と下女のお竹と書生杉山のみで、廣き住居の分けて寂しい。敬藏の書齋には、今しも由利子が机によりて、眺むともなく庭の面を眺めて居る。漢學者の口調で言へば、眉は遠山の霞の如く、眼は秋波の清きを湛へとでも言ふ可く。鼻筋通つて口元の引絞つた具合、物思ひの爲か、少し落けた頬に、後れ毛の二筋三筋ばらりと下がつた所、一層凄味を帶びて居るが、又何處となく愛嬌なき容貌は、何れ美人の銘ははずれない。

獨寐に、夢は遠き海路の彼方なる、香海の空に彷徨ひ隔つとも、思ひは通ふ夜半の燈火に向ひて現の中に天涯の孤客と語り。我も思ひは、同じ血を吐く子規の聲に、殘んの夢破れて、夢より淡き有明の月を喞ち。風吹く日。雨降る夜。只管無事に御歸りを、待つ身は長き十日間の朝夕、到底彼女の思ひは絶へなかつたであろふ。

彼女は暫しうつら／＼と、夢想に驅られて居たが、襖を開く音に醒されて、やほら振向ひた。召使ひのお竹は、新聞紙を持ち乍ら、周章しく入來り、由利子に渡しつゝ、顏色かへて「奥樣大變です、杉山さんが此新聞紙を見て、旦那樣が御病氣だのか書てあるつて。」と言つた。由利子は此一言を聞くや否や、心臟の皷動は俄に烈しくなつた。今の今迄、此事許り思つて居た矢先に旦那の御病氣！彼女は益胸逼つたが、もしやと疑ふた。誤りであつて呉れた念じつゝ、擅へる手に、新聞紙推開いて、詰度電報に眼を濺いた。嗚呼止んぬ？果然。敬藏の病氣は、眞實であつた。

◎醫學士船山敬藏氏は黒死病の爲に冒され病狀危篤なり(香港發)

彼女は持ちし新聞紙を投げ捨てた儘、憚る人目なければ、打臥して思ふ存分泣いた。お竹は語を盡して之を慰めた。由利子は只一筋に驚ひたが、やがて又思ひ返した。「いや〳〵夫にしては、樫田さんも御出だから、一應の知らせはある筈、旦那の御出になつてから、まだ端書の一度來た許り。夫にも香港へ安着したと言ふ事より外はなかつたつけ。大方是れは新聞社の誤りだろふそふ〳〵」と彼女は稍安心したが、愈夫とは確信する事が出來なかつた。彼女は一通の電報紙に、手早く書いて金と共にお竹に渡し「急ひで之を電信局に持て行つて御呉れ急いで」と促した。お竹は立て行つた由利子は始終我夫の事が心に懸つて、又新聞紙を取上げて、つく〳〵見詰たが、電報は矢張り元の儘で、見る程氣を揉ませる許り。彼女は立つて庭に下りて、せめてもの心遣りに、散歩を始めた。日影落ちて松の木陰、泉水の傍、やゝ仄暗くなれば、塒に歸る雌雄の鵠々、由利子が立てる松の梢を掠めて、此方より彼方の森に、睦しそうに話しつゝ、飛んで行つた。彼女は羨ましげに、彼等を見送つた。彼女に取つては、是も物思ひの種であつたかも知れぬ。

其　參

茲は香港病院の一室で、今しも寢臺の上に横りて、顏色青ざめ、頬骨出で、凹みし眼の一層鋭く、天井を睨んだ儘、何だか始終考へに沈んで居るのは、是れ醫學士船山敬藏である。

彼は最愛の妻を遺して、黒死病研究の爲に、香港に來てより、研究所に行つて、餘念なく研究に從事したが隨分得る所あつて、まあ五六日も熱心に研究したらば大概其原因を發見する筈であつたが、死躰解剖、實地試驗等、餘りに該病に接近したので、遂に彼自身黒死

病患者となつてしまつたのである。彼は實に憤慨したが、…病魔には勝たれない然し固より覺悟の前で、彼自身は、左程驚かなかつたが、病院長や書生樫田は口をすばくして只管療養を勸め、東京の妻君に迄知らせんとしたが。彼は頑然「なんの是位の事そんなに驚かんでもいゝ、其上内に知らせるなんて馬鹿な事、可愛そふに由利子を驚かせる許りさ。よしにしよふ」と口輕く言放つて、返つて書生に命じ、己に代つて試驗させた。彼は病苦を忍んで研究に餘念なかつた。否彼は終に彼自身の病症を忘れて居たのである。

彼は重き頭を枕に乘せた儘、身動きも得やらず、さも苦しげに大息ついて、「樫田に言ひ付て置た試驗は出來たか知らん。あれで充分の成績が擧つたら原因も略確定するんだ。己が常の身躰であつたら、充分分るんだけれど…あゝ仕方がない…が大方出來る方だろふ、出來れば、己は己丈けの職分を盡したんだから、死んでもいゝが…由利子が嘸歎くだろふ。二十にも足らない年で…夫にまだ來てから一月許りしか經たない内に…然し喜んでくれ。己は尊き天職を盡して死するのだから…あゝ天命だ〳〵、何事も天命だ」。彼は瞑目して何か心に念じたが、又やがて苦しき吐息を洩した。

戸を排して入來る音に、閉ぢし眼を開けば、書生樫田が手に一片の紙を持つて、枕邊に立つて居た。敬藏は「出來たのか」と尋ねた。樫田は忙はしく「いやまだあれは出來ませんが先生只今奥樣より此電報が參りました。開きませふか」。と言つた。敬藏は今まで由利子の事を思ふて居たので、何となくなつかしく「そふか封を切つて見ろ」と言つた。樫田は封を切つて讀んだ。「先生貴方の御病氣は眞實ですかと書てあります。何ふですか、私が先日申上た時知らせて御置なすつたらよかつたつけ、どふせ新聞に出るんですもの、奥樣も

新聞で御覧なすつたと見へる。御心配でしよふから、早く知らせて御上なさい」「ム、夫が宜しい。己も出る



時、泣顔見するだろふと思つて、新橋迄の見送も許さなかつた程で、此度も知らせては却て驚くだらうと思つて罷と知らせなかつたのだ、然し己ももふ迚も長くないから、生前に一目なりと別を惜んでやろふ。早く知らせよふ」と流石に彼も心殘りしと見へて、電報紙に「病氣危篤早く來い」と書いて樫田に渡した。樫田は之を持て立て行つた。

＊　＊　＊　＊

敬藏が病氣、愈危篤と聞いて、香港駐剳の公使よりは言ふ迄もなく、重なる人々は、彼を見舞ふた。病院長は、時々其病床を見舞ふて、又格別に、看護の勞を取り、昨夜の如き、恰も徹夜の有様であつた。今日は愈く由合子が來べき日である。敬藏は夫より、寐臺の上に横り乍ら、樫田に命じて、益研究に其身を忘れた。彼の献身的究研の結果、黒死病の原因も判然したので今日は又た樫田に命じて、内務省への報告書を作らせつゝある。

敬藏は一瞬〳〵死に近きつゝある。彼の青ざめたる顔

色、力なき眼ざしは、早や死人も同然である。彼の唇より、消へ行く霜より賴りなげに立つ蒸氣の如く、僅に洩れ來る呼吸は、冥途より吐くかと思はる。嗚呼、今彼の生命は、一糸もて千斤の釣鐘を繋げるが如く、實に危きものである。されど彼は、報告書を見る迄は死なじと誓つた。此一片の氣こそ、即ち彼の生命であつた。

傍らに在つて、專ら看病の勞を取つて居た病院長は、彼に藥を勸めた。彼はやほら是を飲干して、苦しげに言つた。「報告書はまだ出來ないのですか」と病院長は「まだ出來ません」と言つた。

彼の氣力は稍弛んで、吐く息は次第に弱つた。病院長も早やもて餘したる途端。破れん許り、戶を推開いて來たのは、書生樫田であつた、彼は握つた報告書を、其儘敬藏に渡して、息つきあへず「先生報告書です」と叫んだ。報告書の一言に、俄に元氣づいた敬藏は、閉ぢし眼をきつと開いて、報告書を打眺めた。彼は暫くして「ム、是で宜しい」と言つたぎり、又眼を閉ぢたされどまだ由利子は來なかつた。病院長と樫田は、只心のみせかれて、一室をうろついて居るのみである。異樣の思地して、只呆然と立ち居る二人の鼓膜に響く戶外の物音！四つの眼は齊しく戶に集注した。映じたのは、果して花の如き由利子であつた。彼女は挨拶もそこ〳〵、我夫の病床に近寄つた。見れば早や呼吸は有るか無し、彼女は敬藏に抱付いた儘、一言も得言はず、只潸然と泣くより外はなかつた。病院長は氣の毒げに、敬藏が半死の身軀に藥を注射した。由利子は聲を限りに呼んだ。敬藏は、僅に眼を開き乍ら、由利子を眺めた。彼は由利子を認め得しと覺しく、片頰に浮べし笑を名殘に、其儘息は絕へた。されど、終に彼は握りし報告書を放さなかつた。

敬藏は逝矣。嗚呼彼は遂に此世の人でなかつた。然り、

彼の身幹は死せり。されど彼が世に遺ぎれたる尊き功績は死なゝかつた。（終り）

狸の話（上）

園部紫嬌



かち／＼山のお話や、舌切り雀の事は幼年諸君の疾うに御承知のことでもあり、且つ古う御座いますから、紫嬌は、一ッ狸の事について、御話を致しましやう。

いつの頃で御座いましたか、武藏國秩父の山奥に、狸と兎とが、穴を並べて、棲んで居つたことがありました、此所は、洵に名高い深山ですから、何百年となく、樵夫の入つたこともなく、從つて松や杉の老木が生ひ茂つて、晝間でも暗い程であります。斯樣に凄い處でありますから、誰れあつて足を踏み入れるものはありません。結句之れが即ち狸や兎に取つて、僥倖なので、極めて氣樂に遊んで居ります。

一日の事、天氣も至つてよく、風も靜かなので、狸の子や兎の子が、穴を出でゝ、お互ひに遊戲合つて居ります。

兎の子『オイ／＼、狸ちやん、お前の父は、餘ッ程馬鹿ものだネ、ソレも其の筈サ、先祖からして馬鹿だもの……

子狸は、聽き咎めて、

子狸『何んだつて、己等の父や先祖が馬鹿…馬鹿だつて、ソ、ソリヤ何ういふ譯で

兎の子は、クス／＼笑ひながら、

兎の子『何ういふ譯つて…お前も頓間な奴ちやねいか。知らなきや、いつて聞かせやうか。

子狸躍起となつて

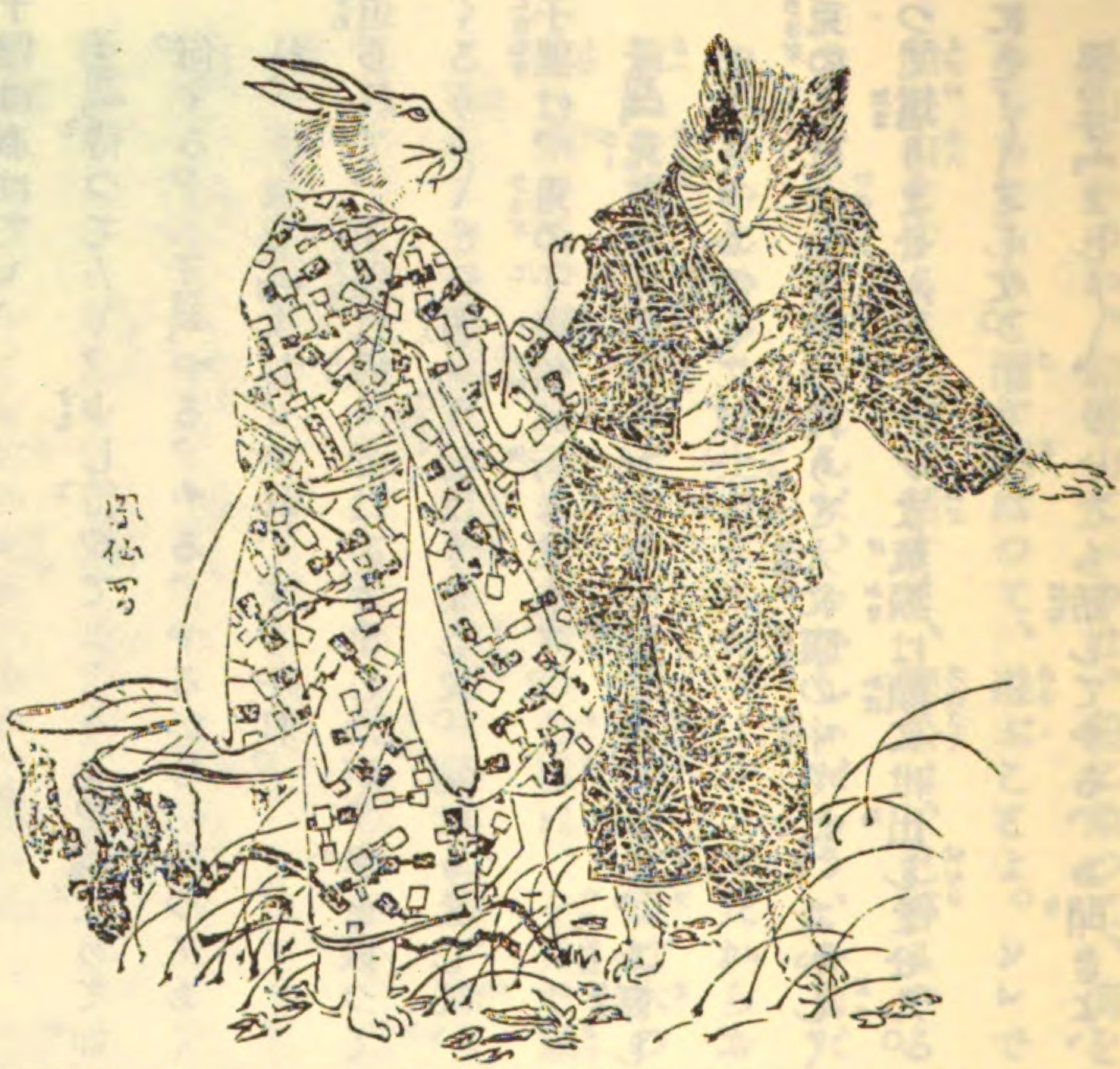
子狸『やい、いへ、己等まで頓間だなんて、

兎の子は、益々おかしくなり、此奴一番からかつてや

らうといふ考へで
兎の子『いふ、いふ、いふから何にも左樣怒らなくつてもいゝぢやねいか。 子狸『ウム、いふなら怒らねい。 兎の子『だが、只ぢやいやだ。 子狸『只ぢやいやだ？ソンならどうすればいふんだ。
兎の子は、此の時、首を傾け、態と眞面目に、
兎の子『お前ソンなに聞きたいか、聞きたきや聞かせてやるが、怒つたりナンかするものにや、己等話さねい。 子狸『怒らね、怒らね、屹度怒らねいから、話して呉れ。 兎の子『ヨシ左樣なら話してもやらうが、只ぢや話せねいな。 子狸『只ぢや話せねい？誰も只話せつていひやしねいぜ。 兎の子『ソンならお前何をよこす。
子狸、茲に至つて、稍々困つた樣な顏付にて、
子狸『何につて、左樣さナー、今茲に何にもねい、
兎の子『無くつちや、己等いやだ。

子狸は、ハツキリと兎の子に刎ねつけられて、詮方なく、茫然として居りましたが、とう／＼泣き出しました。
兎の子は、泣かせようとて、いつた譯でないから、今更ら氣の毒になりました。
兎の子『狸ちやん、狸ちやんてば……なにもソンなに泣かなくつてもいゝぢやねいか。
子狸は、泣き聲にて、
子狸『だつて己等くやしくつて、 兎の子『くやしい、くやしいなら、聞かなくつてもいゝぢやないか。
子狸『ソウぢやねい、兎ちやんにやるものがないから、ソレで己等はくやしいんだ。 兎の子『何んだソンな事か、ソレぢや泣かなくつもいゝ、己等何にも入らないよ。其のかはり、狸ちやん……
兎の子は、斯ういつて、ぢつと子狸の顏を見詰めました。子狸は、兎の子に見詰められて、又何にかいはれ

はすまいかと、氣遣はしさうに。



子狸『テンだい。 兎の子『アノお前己等のいふ事は、
互何んでも可くかへ。 子狸『ア。己等に出來る事なら。

兎の子『ウム、ソンならいふが、お前いつてから、ソンな事は、己等いやだなんか、いつちやいやだよ。 子狸『マア、いつて見な。 兎の子『いつて見なつて、お前ソンなら、己等のいふ事を可かない氣だね。

子狸は又かといふ樣な顔付にて、うらめしさうな眼付をして、兎の子の顔を見上げました。ソして暫らくして、

子狸『兎ちやん、ソりやお前あんまりだよ。何にも己等がお前のいふ事を可かねいとはいへやしねい。ソレをお前がなんのかんのつて、己等悲しくつて〳〵泣きたくならァ、 兎の子『ソンならいふがね、お前屹度だよ、言つてからいやだなんかいふと、己等きかねいよ。 子狸『いゝよ、いへッてば。 兎の子『ソレぢやいはう、尾を振つて三遍お廻はり。 子狸『尾を振つて三遍廻はれつて、ソリヤヒドい。 兎の子『いやだ、いやならおよし、己等話なさない許りだ。

子狸『いやぢやねいが、ヒドイなア。　兎の子『ア、面倒だ、もうよさう。

子狸はあはてゝ、

子狸『待つて〳〵、少し待つて……　兎の子『止めて如何する。　子狸『やる、やる、やるから、待つておくれ。　兎の子『よし、やれ、すぐやれ。

迫られて、子狸は澁々ではありましたが、尾を振つてくるり〳〵と三遍ヶ程廻はりました。廻はりまして、子狸は、兎の子の傍に行きまして、

子狸『兎ちやん、いゝだらう、廻はつたから、お話しよ、さアお話してば。

兎の子は、してやつたりと大に腹の中では、おかしくつて堪りませんが、ソンな氣振は顏には出しません。にこ〳〵として。

兎の子『よし〳〵、ソンなら話してやる、お聞きよ、一體お前の先祖は、人がよくいふだらう、馬鹿狸〳〵ツて。　子狸『ウム、左樣いへば左樣サナー、

兎の子『左樣いへは左樣サイーなんて、お前も呑氣ぢやねいか。そりやそうとその馬鹿狸……ぢやなかつたつけ、お前の先祖の狸公はナ、かち〳〵山、アノそれ、向ふに見へる山があるだらう、アの山で己等の先祖にいやつていふ程火傷をさせられて、其の上、火傷に大毒なとうがらし味噌を膏藥のかりはに張られたのをお前知つてるか。

子狸は不思議そうな顏をして、

子狸『ウンニヤ、知らねい。　兎の子『ソレだから呑氣だつていふのよ、ソレから又其の次きなんかは、大變よ。

子狸うろたへて、

子狸『た、大變て、ソ、ソリヤなんだい。　兎の子『あはてる事アねい、昔の事だ、……其の次といふのは、己等の先祖が、お前の先祖を計畧に掛けて、船

遊山をしたのだ。子狸『船遊山ていのは。兎の子『船遊山ていのか、船遊山ていのは、船に乗つて、河をあちらこちらと漕ぎ廻はつて、遊ぶことよ。ソレで船遊山をするといつて話すと、狸公は、己等もやるつて、土舟を拵へたんだ、おかしいだらう、お前だつておかしからう、土舟なんか、……ソレだからお前の先祖は馬鹿狸だ。……ソシて己等の先祖は木の舟へ乗つて、河へ出ると、お前の先祖は、土舟で以て跡からやつて來て、己等の先祖にいふには、斯うやつて、ぶら〳〵乘廻はしたつて埋らねいから、二人で棹の叩き合ひをやらうぢやないか。ソうすると己等の先祖は、馬鹿が今に見ろとは思つたが、すぐによろしいと承知して、軈て始めた、棹の叩き合ひを始めた。スルとお前の先祖の乘つて居る船は、土だから段々水が浸て柔らかくなつて來た、ソコを己等の先祖が見込んで、棹で一突き衝くと、お前の先祖の船は、スグに衝き破されて、ソコから水がドシ〳〵入り込んで、見て居る中に沈んでしまつた。

子狸は眞ッ青になつて、ふるひながら

子狸『己等の先祖はどうした。兎の子『きまつてらア、スグ沈んで死んだのさ。……其の孫やなんかだものお前の父も馬鹿なのは當然前さ、

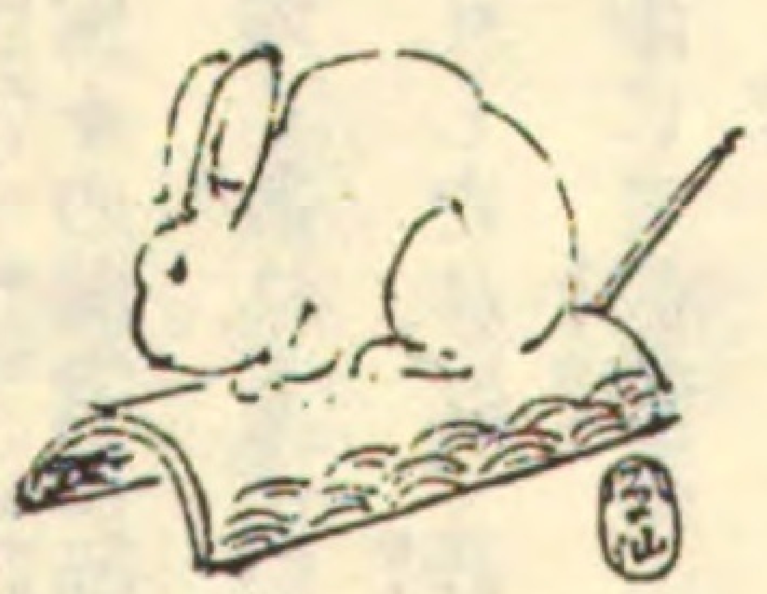
子狸は、此の話を聞いて、暫くは泣いて居ましたが、軈て、涙を拭きュッとして、

子狸『お前はそういふが、お前達の先祖は、如何な藝がある。

兎の子はせゝら〳〵笑つて、

兎の子『なくつてよ、いくらでもある、併しお前なんかに話したつて、分らねいから、マア引込んで居ろ。

兎の子は、斯くいひつゝ、子狸を追ひやり、自分も亦穴に入りました。



⦿生花八つの嫌　第一、古今（一季過ぎし花と當季の花を添ゆるを嫌ふ）第二、遠近（後に野を見せ前に山を見するを嫌ふ）第三、三木（木ばかり三種取り揃ゆるを嫌ふ）第四、四草（草を四種さすを嫌ふ）第五、助考（木をなびかけて其枝に草を持たせて挿すを嫌ふ）第六、投木（木の根を草にて隠すを嫌ふ）第七、捻（草木挿花の時草の根と木の根と入れ違ふを嫌ふ）第八、十文字（眞を横に切るを嫌ふ）なりと

談叢

南極地方探撿記（中）

楓葉譯述

是より數日の間水も空氣も華氏四十四度の温度なりしが、十一月六日南緯五十八度十四分東經百六十二度三十五分の處に到り、夥しき氷塊の四十哩乃至六十哩の長さに渉り、高さ三百呎に及ぶものを見たり。頂は平にして純白なれど、側邊は灰色にて、處々の洞穴は緑の色を帯び、波は怒て之をうち、花の如く散れり。然るに此時忽ち船の車輪に損所あるを發見したれば、詮方なく船を北に返へしてチャルメルス港にて修繕し、猶水手を増して十一月廿八日再び南方に向へり。

南緯五十五度に達すれば、信天翁の影も見ざるに到り、腹白きペトレル鳥は猶船を逐ふて來り、鳶色の頭緑白の翼をもてる賊鷗鳥あらはれ來りぬ。南方に進むに從ふて禽獸の羽毛の色次第に薄く〳〵なり行くは、今に初めぬ造化の神の生物自衛の手段を授けたる證據にて、白きペトレル鳥の雪の上にとまり白臘虎の氷塊の上に眠るなど殆んど何れを其れと見分け兼ぬる位なり、十二月七日中央檣上の遠見臺より茫々たる大氷野の端を見る、物見臺の上は甚だ寒ふして、氷りたる雪片面をうちて鍼の刺すが如く、厖大なる望遠鏡の玻璃鏡は吾吹く息直ちに氷りてまた別に一枚の玻璃鏡をな

せり。大凡南極地方を航海するには恐るゝ所は、氷野氷塊の危険なるが、此等は常に空に白色の反射を為すを以て、空を見て氷塊氷野の存在を知るを得るなり。また氷野の間を乗り分け行くに、波烈しきときは何れの方より風の吹き波のうち來るか判断に苦しむことにて、此際一度用心を緩むれば船は忽ち絶命す可し、斯る時は氷の上に臥して耳をつけ心を澄して聞く時は其



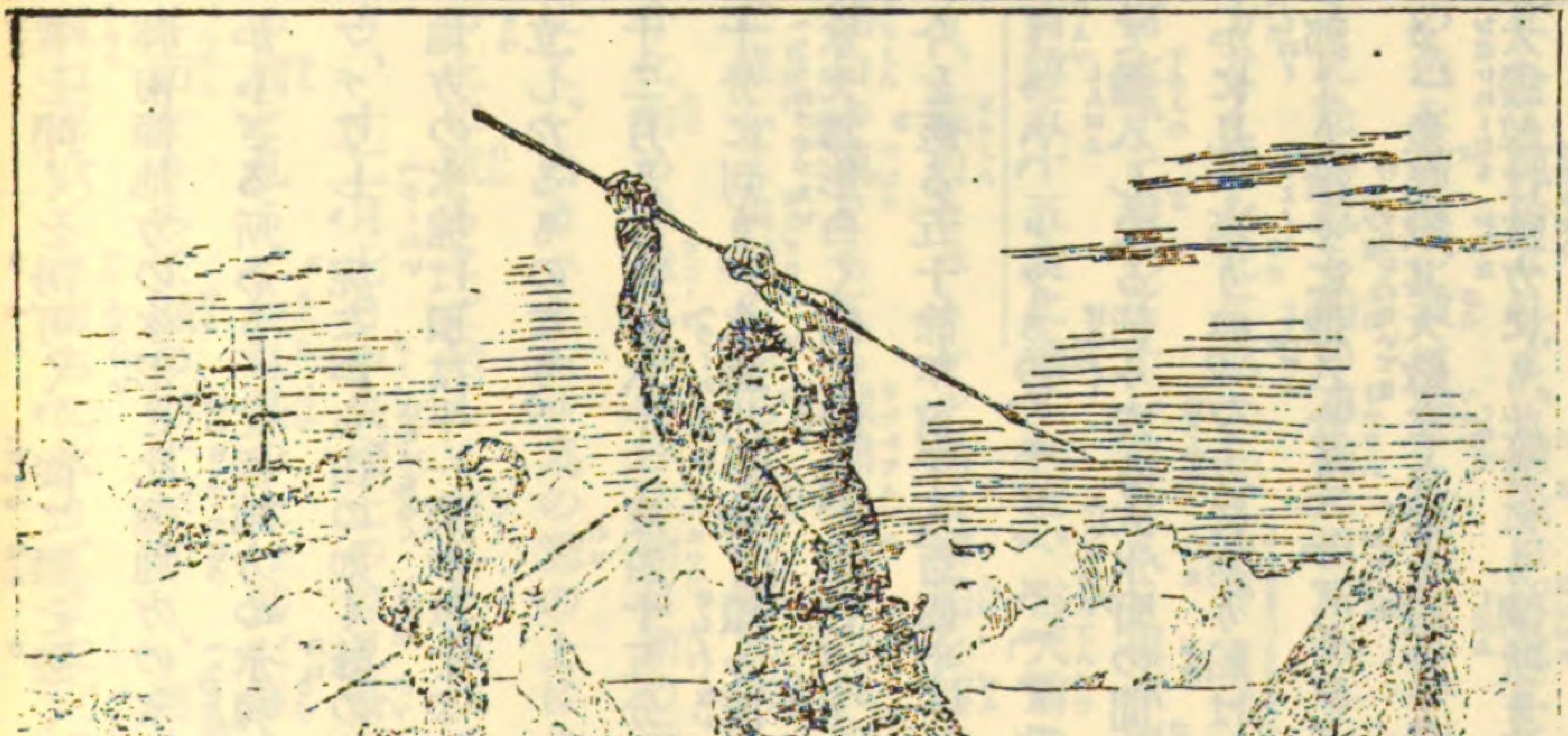
音を聞くを得可く、従て難を避くるの道ある可し。一躰南極地方の氷形と北極地方の氷形とは、頗る相同じからざる所あり。北極地方の氷塊は無數の塔をなしアアチなし、宛ながら山の如く峰の如きものにて、南極地方の氷塊は頂は平一面の原をなし、側は壁の如く直立したるものなり。

十二月八日南緯六十三度四十五分、東經百七十一度三十分に到り、氷塊川の如く續々流れ來り、南の方には氷光雪影白く空に映じ、白色ペトレル鳥頻りに飛び、今を距る五十餘年前千八百四十一年一月五日サア、ゼームス、ロッスの「エレバス」「テルロル」の二艦を率ひて進入したる茫々たる大氷野の間近くなりしこと明らかに見へ來りぬ。夕方に到り船はいよ〳〵大氷野の外郭より徐々に進入せり。「アルゴノウタ、アンタルクチカ」魚無數其大敵なる鯨を避けて氷塊の洞穴に隠れ、大鰭鯨は彼方にも此方にも潮吹き居りて、其音數哩の

外に聞ふ。直ちに其三四頭を射とめたるも、線斷へて之を失しぬ。白色ペトレル鳥また多く飛べり。此處にもまた數頭の臘虎を射とめしが、大抵は皮膚に疵あり。此は海豹などの牙にかゝりしものなる可し。ペングリン鳥また夥しく、我等一行の氷野に入り來るを珍らしげに歩み寄りて打眺めければ、難なく其數疋を獲たり。

臘虎を殺すには、或は銃を用ひ或は鉾を用ふることなるが、一躰南極地方は人到ること多からねば、臘虎も人間を恐れず。我等が殺さんとて近づく時も、大方は熟睡し居ることとなり。併し鉾を用ふる時は隨分慘刻千萬にて、皮を剝ぐには半死半生の時に於てすること常なり。刄物を以て其皮を剝ぎとれば、半生の臘虎は苦痛のあまり身を踠き去らんとして却て己れ自から我皮を剝ぐに到る。此大氷野に入りし時は、氣温二十五度水温二十八度にて、氷野を通る間甚だ更らざりき。

十二月十四日ベラニー島を見る。此あたり氷塊甚だ大



なり。ベラニー島の峰の尖は海拔一萬二千呎の高きにあり。此邊氷野の間を通ずる水流極めて狹く、氷片水中に突出して、我船の輪に中り、蒸滊力を用ふるも氷片の間を押分け行くこと甚だ難ければ、況して帆走もて此間を通らんことを覺束なきを以て、路を轉じぬ。眼を擧ぐれば、茫々又漠々、唯端なき大氷野を見るのみ。十二月二十二日耳なき臘虎を射る。不幸にして頭潰れぬ。十二月廿四日は頗る荒たりしが、夕方に到り晴れ、太陽は恰も最も低く地平線に達せり。基督降誕日に夜半の太陽を見し者、恐らく全世界に我等のみならむ。十二月二十六日、北極圏を越ふ。

二十八日機關長誤て機械に觸れ、右の第二指を截ち一脚を折りぬ。程なく若年の水手一人發狂しぬ。新年は南緯六十六度四十七分東經百七十四度八分の處にて迎へ、祝砲を放つて南極の天を震はせり。一月十四日に到り、大氷野にあること三十八日の後、首尾よく漫々たる水に出でたり。一望碧茫々、一吹の風だもなく、皺程の波もなし。二日の後、我等が目指し來りしヴィクトリア、ランドを遙に望む。十八日の午に到り、ヴイクトリア、ランドなるアデール岬の西北に碇を下ろす。同岬は南緯七十一度二十三分東經百六十九度五十六分にありて、三千七百七十九呎の高に達し、同所より眺むれば西に南に眼の届く限りヴィクトリア、ランドの沿岸を見る、ヴィクトリア、ランドの麓は黒き裸岩にて、次第に高くなりて終に海拔一萬二千呎の高さに達す。中にもサビン山の尤も高く、夜半太陽の光を結びて、皎々眼を眩ますばかりなり。此高深には圓錐狀の峰多く、アデール灣の近邊にも其數二十に及び、中には雪層の上に火山灰の積みたるもあり。八千呎ばかりの高さなる一噴火峰は雪も左まで積らす。近頃まで噴火し居たるものと見ゆ。

◉風邪の流行　昨今は餘寒尚ほ烈しき爲めにや風邪大に流行し一戸に一二人咳を催し又は鼻を啜らざる人はなき程なり昔天明の頃咳風邪流行せし時「これやこの行も歸るも風邪ひいて知るも知ぬも大方は咳」と云へる換歌の行はれたる事ありしが昨今もまた其類なるべし

家　政

病人の食物　ＫＫ

此頃の如く病人多き時節には、看護するものも、病人の食物に餘程困窮する事なるが、左の食物などは滋養にもなり、消化もよく、食物を制限せらるゝ病人にも適する食物なり。

卵二個の白味と黄味とを分ち、白味を皿にてかきまぜ泡をたゝせをき、一合の水に大匕二つの葛をとかし、一合の水を沸騰せしめてこれに入れ葛ねりを拵へ、然る後前の白味を混じ形よき丼を一寸しめして、これにうつしをく。次に黄味に大匕二つの砂糖を投じ、乳を手つけ加減に温めたるを少しづゝ、卵の煮えぬ樣、泡のたゝぬやうかきまぜ、温火にのせて八分間ばかりかきまわすべし。然る後前の丼を皿に倒にふせて出し、黄味をかけて食するなり。色味共に美し。

小兒のとりもの

生姜糖　バタと牛の製脂とを各茶碗一杯、砂糖三七、卵大なるもの一個、生姜の粉大匕山盛一杯、パンだね小匕山盛一杯をよく〳〵すりまぜ、これに温飩粉茶碗四杯を混じ、平たきブリッキに油をひき、へらにて可成薄くのばし、竈に入れてやく。温きうちに庖刀にて切るべし。

カルヤキ　卵の白味を泡立て、砂糖を充分かきまぜ、手でたへするほどになりて、ブリッキの板に油をひき

これに落してやくなり。極少々落さゞれば、非常に膨大るものなり。

ドーノツト　温飩粉五合に、炭酸曹達小匕半分に、砂糖大匕一杯、卵一つを混じ、水(牛乳ならば最よし)にて捏ね、いろ〳〵形をつくり牛の製脂にあげて食す。

馬鈴薯の一料理

六個ばかりの馬鈴薯を取り、皮をむきて鹽水にて湯煮で、これをつぶして冷やし置き、然る後卵三個をよくかきまぜ、牛乳一合温飩粉少しを加えたるを、さきの馬鈴薯に混じ、バタか牛の製脂か、ごま油をひきたる鍋にてやき、温かき中に食すべし。

香しき菓子

コップの三分二ばかりのバタ或は製脂に同分量の砂糖を加え、よくかきまぜたる卵三個を入れ、これにまた糖蜜をコップの三分二ばかり加え、よく〳〵かきまぜ、然るのち温飩粉をコップに山もり二杯半ばかりを投じ、匕二杯ばかりのパンだねと、肉桂匕一ッ及鹽少し牛乳コップ一杯を混じ、平鍋にてやくべし。風味高尚にして、上等の菓子を得べし。

格言一掬

仕事をなすに、五分間の精細なる仕度は、往々にして一時間の辛勞にまさる事あり。

事を成さんとならば、事情の奴隷となる可からず、事情を奴隷とすべきことなり。

我友達を以て自らを判せよ。友は自分の善悪高下の映れる鏡なり。

父親の心得

吾人はこれまで一家の主婦たる母親の心得を幾度となく説くと同時に、父親の心得をも記したり、然れども

吾人は左に記す新しき事實に接して更に父親の心得を記す。

吾人が知れる富豪家某、妾と共に上海に住し、此頃死亡しぬ、此の訃報一たび本家たる家族に達しぬ、妻女も泣きぬ、兒女も泣きぬ、家族も泣きぬ、上海なる夫の臨終にすら遇ふこと能はざるを歎き、日々泣き續け悲愁禁ずる能はざる母を見て、其兒女某之を慰めて曰く、母上もう御歎きは止り玉へ、父上存生の時すら、斯樣に日々御歎き玉ひしにあらずやと。

此一語無邪氣なる少女の口より出でたり、此一語には悲哀の内に怨恨の情を含むものなからんや、父親が存生中に何故に母親が毎日悲泣し居たりしか、無邪氣なる少女が眼中にも、父が放蕩なる、無分別なる事は分明に反映したること疑なかるべし。

さらぬだに女兒は父親よりも母親に同情を持つものなり、若し父が母を不人情、無分別、殘酷なる取扱を爲さば、女兒は必らず母親のために同情を奮起し、母の味方になり、父を怨みつらみ、父を無情の人と思ふに至らば、父子の情漸次に滅却するは、これ人情の然らしむ所なり。

斯の如き事情豈右の一家に止まらんや、吾人は斯の如き事實、往々耳目にするは、未だ我國社會の道德薄弱なるを歎ぜずんばあらず。

人の不幸は家庭の壞亂よりは最大なるはなし、世間家庭壞亂の基は、多く父親の不心得より起るもの多し、他人己を怨むさへ厭ふべきに、最親の妻、最親の子、最親の家族に怨を結び、家庭の内に波瀾絶えざるに至りては、抑も亦誰の罪ぞや、これ罪惡の大なるものなり、右の事實を記して父親たる人の一覽に供す。

書籍貸與に付て心得

なゝみ生

書籍のかしかりは常に朋友知人の間にあることとなるが借たる人の不注意不心得より貸主に少なからざる迷惑をかくること鮮なからず貝原益軒先生の說に曰く

人の書物をからは我書をさしおきてまつ人の書を專一に見て早くかへすべし人の書を見すかして久しくとめおくはおこたりなり、

人の書をからは損ひ汚すべからず屋漏みづけふり猫鼠、水火、賊火、小兒等のふせきをすべしかれる書は器に入れおきてみる時取り出たすべし

凡人に書をかせは我用ある時ことかけぬされば人にかすことをおしむべし是をもてかれる人おもんばかりて早くかへすべしかす人はかれる人の貧にして書なきを憐みてかすべし惜むべからす富める人もし書を見る事をこのめとも書を買はされは學すゝます我が書にあらされば用ある時考へ難し財多き人は書を買ふことをおしむべからず。

何れも能く心得て置くべき事なり。

筆の序に記す余は年來『圖書貸借錄』なる小冊子（罫ある半紙をよしとす）を作り之れを貸與借受之二部に分ち橫線を引き貸與之部に貸與書名冊數貸與年月日戾來年月日及び姓名借受之部には書名冊數借受月日返却月日及び姓名の五欄をつくり貸借のつど〳〵書名冊數月日姓名等其々記入し又戾來返却のあることに月日を記入し以て圖書貸借を明かにせり。

ひびのくすり

同

今頃の寒さにて水仕事するおさんは申すに及ばず針とる婦人方の顏やら手やらひゞの切れてみにくきよりは痛まるゝ苦しさを察して其の治療法を敎え參らせん、

此頃何處の八百屋にても求め得らるゝ蕪根を山葵おろしにておろし之れに酒少量を加へて數時間火の上にのぼせ時々かきまわしてべく固まるを待ちて火よりおろし茶碗なりコップなり何になりとも移し置き入浴後之れをひゞの切れたる處に能く〳〵塗り込むべし。

廢物利用═草稿紙

詩作る人和歌よむ人ことに初學のものが一句一首を出すにも或は消り或は加へ消りては添へ加へては又消り後始めて出來上るを常とすあたら一枚の白紙も詩歌一首の爲めに費やさる事あり余は此頃一案を出して此費を省くことゝなせりそは一度使用せられたる古き書翰袋を以て之れにあつるにあり、

茲に古き二重なる書狀袋をとり可成丈け注意して上一重の裂けぬ樣に下なる一重を取り出し一剪を加へて裏表共に使用するにあり事少しく面倒の樣なれと思ひ立ちてからは最もやすき事なり詩作る人歌よむ人試みられては如何。



◎三月雛人形　三月節句の雛人形は最早此四五日前より十軒店其他の人形店にてそろ〳〵店頭飾附に着手せしが本年は別段昨年に比して變りたる趣向はなき模樣なるも直段は概して諸物價の高直につれ一般に高模樣にして一二割方高直なりと

社交一斑

流行の栞

流行子

男子外套

男子外套の事は數々記したれども、前號に婦人の外套の事を記し尚は

餘寒嚴烈の候なれば昨今目擊せし外套の流行を記せば後から見れば烏賊樣紳士と言へば言へ、一般の流行は鳶形なり、道行風は老人には相應しけれども、若者には柔氣過ぎて不可なり、さて鳶形の内にても後は單、帶つき八分の勢にして單のみつきて帶なしか、帶のみにて單なしは黒人の好む所にして、帶單共につかざるは、すつと黒つぽい好みなれど体裁は帶と單のあるかたよろし。

縮緬の下締

一時白縮緬の中巾一反を下締にし、其あまりを上へ通はする風流行し浴後姿など帶をヌキにしたる時くる〳〵と腰を卷くことはやりたれどもこはいやらしき風俗なりとて今は全く廢れたり、近頃粹人社會に流行する下締を見るに、縮緬を幅五寸丈け一丈一尺位にしてお納戸と紅掛との伊豫染にし、縞多又はさや形を置きたるもの盛に行はる、價は二圓四十錢位なりと聞く、

三枚重の裾廻はし

紋お召の三枚重又は二枚重の裾まはしは淡きよりも濃きかたへ移りゆく傾向なり、其色はお納戸、勝色等目下の流行。

婦人紋付羽織の色合

婦人の紋付羽織の事はしば〳〵記したれば今は殆んど書くべき餘地なし然しながら茲に特別に記し置くべきは紫紺色(江戸紫)の流行する一事なり、此流行は京大坂にも行はるゝ由なるが、東京流行界の傾向が次第に古へ復るより起りし現象なるが、兎に角今秋より冬にかけ流行盛なるべきと豫報しまゐらせ置くなり、之につれて靑竹の色合も妙齡の婦人に弗々見受らる。

流行の羽織紐

昨今流行の羽織の紐は昔に返りて平打丸紐など最も賣捌け好し色は靑、白、水色にて女物も水色が賣行きよし男物の紐は長きが當世にて通とか粹と言はるゝ藝人連は牡丹留の紐をなし書生さんなどは白木綿の長紐を結びて肩に懸けたるが多し昔元文の頃は長紐を結びて下駄のあたりへ垂れしと流行また平手牡丹懸は專ら寶永正德の頃に行はれしと云へば此頃の流行は逐次昔に返り行くなるべし現に長羽織の如きも元文年間上方より都古路豐後椽が下りし時着始めしが其後中絶して今日に至りて復た盛に行はるゝに至りしなりといふ。

萬年靑の流行

目下萬年靑流行關西は勿論四國九州又は北越奥州地方は殊に流行の燒點となり在來は白龍物のみ好みし地方も目今は優美なる永島性を好み織姬御飯等實行長く一般に縞の入りたる品が最も流行す左れば根岸松を始

めさし松の霜寶舟の類は大に騰貴し其相場は二枚葉の上物にて根岸松は金五百圓、松の霜は金八十圓、寶船は金六十圓、金龍は金八九十圓なり又一般に愛する通例品は上等四五枚物にて福包は金二十五圓、日月星は金三十圓、織姫は金二十圓なり此頃府下にては目下小萬年靑も流行し其形小にして携帶に都合よしとて地方にても餘程愛でられ居れり乃ち金城精（上等親木）金三十圓（分ケ子上等）金十四圓、五瓜及び松島上等四五枚物金二十圓位より例の栗本鋤雲翁の宅にて出來し栗本といふ萬年靑及び關止、友白髮などは四五圓位の賣買なり西洋人中にも大分萬年靑の嗜好家が出來てストーブの上などへ飾るに用ゆるものありといふ。

雜　録

生れ月日の運定

能登川　大橋生

生れ月日によりて、人の運命を判斷する事は、西洋にもあるものと見え、或る英國の著作家は、左の三世相めきたるものを公けにせり、

一月に生れたる者、男子は勤勉にして酒を好み唱歌を巧にし、且つ大事業を支配する人となるべし、
女子は温良にして何事にも堪忍強く、家政を料理するに上手なるべし、

二月に生れたる者、男子は好色家にして、錢を貪り、内にありては吝嗇にして、外にありては浪費者たるべし、
女子は妻としては愛嬌あり、母としては慈母たるべし、

三月に生れたる者、男子は容姿美にして德望あり、又萬事に謹愼なり、併し一生富を得る事能はざるべし、
女子は身材長大にして事に機敏なるべし、

四月に生れたる者、男子は假令ひ智者たる事能はざるも、愚物たる事を免るべし、
女子は多言にして、井戸端會議の會長となるべし、若し上等社會に生るれば、何々婦人會など生意氣會のの張本人たるべし、

五月に生れたる者、男子は愛嬌者にして、人に慕はれ、一生を幸福に送る事を得べし、

女子は愛嬌多く、女子仲間には愛せらるべきも四月生れの女子と同一の性質を有する故、男子には嫌はるべし、

六月に生れたる者、男子は躰軀小にして、婦人及び小兒を愛すべし、

女子は輕躁にして、お轉婆たるべし、但し四十以上より、後悔して始めて善良なる婦人となるべし、

七月に生れたる者、男子は軍事上の嗜好を有して、兎角罪を作る癖あるも、また一個の好人物たるべし、

女子は容貌は美麗なるも狡猾にして且つ執拗に、手管の中に男子を誑弄する事に巧なるべし、

八月に生れたる者、男子は野心深く、又勇氣に富むべし、

女子は活潑にして外出を好み、公共心に富むも、少しく生意氣なるべし、

九月に生れたる者、男子は心身共に強壯にして、一生中多少の失敗を招く事あらんも結局富貴に身を終るべし、

女子は朋友に愛され、男子に慕はれ、求婚者多かるべきも、之が爲に一生良人を持たずして不愉快に終るべし、

十月に生れたる者、男子は詩を賦す事を好み、政事に奔走し改革者として、機に乘じ、或は好運に終るべし、

女子は縹緻よく、老いて宗教の奴隷たるべし、

十一月に生れたる者、男子は容貌秀麗にして、且つ辨才を有するも、注意せざれば放蕩家となるべし、

女子は度量寬大にして、新奇を好む性質を有すべし、

十二月に生れたる者、男子は多情にして物を忘れ易き性質を有すべし、

女子は假令貧苦に泣くも、貴婦人たる面目を重んじ、決して山の神風情に墮落せざるべし、

月曜日に生れたる者は容色美麗なり、
火曜日に生れたる者は上帝の惠に溢る、
水曜日に生れたる者は最上の人物なり、
木曜日に生れたる者は快活にして憂を知らず、
金曜日に生れたる者は生れ甲斐あり、
土曜日に生れたる者は終生衣食の爲に辛苦す、
日曜日に生れたる者は萬事決して不足を感ぜず、

故郷の仙姿

一葉庵主人

花神籠月涵寒影。氷魂聯珠吐夜光とは去る詩仙の詠じたる所なりき「雨はるゝ梅の林の露をさへこぼして匂ふ春の夕風」とは誰がよみたる歌にかありけん水戸偕樂園の名梅によつて今は都にも知られぬ蒲田も好し月ヶ瀬もよかるべし去れど吾は我故郷なるが故にはあらで水戸の梅こそ世には勝れたりと思へり吾れ父母の膝下を辭して早や三歳を過ごしぬ彼方も無事此方も無事目出度二十九年の春を迎ひたれど俗務に追はるゝ身の春秋の省だに思ふにまかせずして過ぎぬるぞ是非なき吾妻一子をあげぬ父母も老祖母も見たしといふ吾妹二人は良緣を得て嫁ぎつ各自早や子を抱きて折々は父母を訪ふといふなり二妹の如何なる母とやなりけん丸髷姿可笑かるべし長妹の生みたるは男なりといふ涼なりけん目元や母に似つらん次妹の抱きたるは女子なりと聞けり色の白き所母に似たらましかば如何に愛らしかるべき少妹は絹服紗に花鳥の繡を自らして送りこしぬ少弟は小學を卒業したりとて名筆を自ら揮ひて一書を寄せぬ父はいふ梅信漸く動く舊正月ともなりなば妻子を伴ひて歸省せよと但し母も然か望め

るなるべし何事を打捨てゝも歸らまほしき思に今も驅られつゝ吾はあるなり

年々歳々花相同歳々年々人不同とかや僅かの內に叔母なる人二人まで產に惱みて死せり親しき友も三人はうせぬ人の世の常なき報を得て一夜淚にむせびたる事もありき「花ぞ昔の香に匂ひけりと貫之のかこちたりけん……偕樂園の梅……好文亭外梅長在。偕樂園中鶴不歸と詩人關某の承對今歸らば其他にも變りたる思の外なる事多かるべし

歸るべし／＼老祖母待てり父母門により少弟妹は閭によつて待つなるべし吾れ俗塵に馴れて山青く水白き邊に入らざるもの猶數年ならんには怏々として遂には病を得るに至らん寂々松間遺世情。翠微風渡四時清。然り他に求めず鶴集洲前馴不去。鹿遊林外近無驚。思を沈め目を閉づれば故山の好景湧然として來り吾遊思を誘ふに似たり景山公偕樂園の記に撰して曰く必其吟詠華晨。飮醼月夕者。學文之餘也と又曰於是藝梅樹數千株。以表魁春之地。又作二亭。曰好文曰一遊。非啻以供他日茇惕之所。蓋亦欲使國中之人有所優游存養焉と藩公の遺志又吾を待つあるなきか歸るべし歸つて存養せざるべからず

身入花中花不見。雙眸只覺白雲深。噫此間に入るべきなり「君ならで誰にか見せん梅の花……吾は確に色も香も知りたる一人なり春風無情遠く薰はよせずともあれ父は幾度か歸れよといふなり今年再び春たり難しいかで故鄕の仙姿にそむくべきものぞ

勿來關（口繪のゑとき）

「吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻かな」

これ八幡太郎源義家が奧州の賊家衡武衡を征討し、凱旋の歸途奧州勿來關に馬蹄を止め山櫻の散るを見て咏せしものなり、武人の風流掬すべきかな

マーガレット、ローペル夫人

在京都　岡田生

女子の美德は愛にあり。容貌如何に麗はしくとも、才學人に越たりとも、慈悲なく愛なきの女子は、其第一の資格を失へるものにして、長く世に稱せらるべきものにあらず。然れば今余が愛情に富みし女子の物語に諸君の眼を借らんとするも無理なることにはあらじ。

昔し「エジプト」にては宗敎上の一種の迷信より、人の屍を木乃伊となして保存するの風俗ありしが、今余が記さんとする女子が、或は其友或は其父の死躰を得んがために身を忘れしは、元より「エジプト」人の如き迷信によるにもあらず、又他の宗敎上の迷信によりてにもあらず、只一片の愛心禁じがたかりければなり。

基督敎の迫害盛なりし時代もすぎて、「ローマ」に於て宗敎の自由行はれたると久しく、生ながら猛獅の窟に投ぜられ、油を注ぎて火の上に渡されたる鐵棒を步ませられ、或は鉛を溶かして口より注ぎ込れたりし殉敎者の話は僅に父老の口より傳へらるゝのみなりしが、「ダイヲクリシヤン」帝一たび位に即きて、基敎の迫害復興し信者は公に神を拜するを得ず、會堂に集まりて讃美祈禱をなす能はざるのみか、偶像の前に腰を屈せず、帝王の肖像の前に香を燒かざるものは悉く捕へられて殘酷なる刑罰に處せらるゝの世となりぬ。

此時に當りて「ローマ」に「シムプリシヤス」及び「ホースクナス」の兄弟ありて、共に熱心なる基敎徒なりしかば捕へられて法庭に到されしに、法官切りに說いて偶像を拜せば其罪を許さんと云ひしも彼等は其信ずる處を主張して屈せず、終に斬刑に處せられ、其身躰は「タイベル」の濁流に投ぜられたり。此處に於て其の妹「ビートリツキス」は悲歎の情堪へ難く、如何にもして

「タイバル」河に投ぜられたる屍なりとも拾ひ得て厚く葬らばやと思ひ、其身の危きをも忘れ、親友「ルーシナ」の助をかりて、百難萬苦意に介せず終に一女子の身を以て激流に投ぜられし同胞の屍を拾ひ上げ、「アド、アーサム、ピリタム」の墓場に埋葬するを得たり。斯くて「ビートリッキス」は帝王の怒を避けて七ケ月間「ローマ」の田舎に陰伏せしが、事露はれて牢獄中の身となり「ルーシナ」の憂ひ遣る方なかりしが、終に刑場の烟となり去りしのみかは、其見苦しき遺骸は棄市せられぬ。「ルーシナ」涙を流しつゝ、其身の同じ刑に遇はんとも顧みずして、「ピリタム」の墓場なる其兄の墓に隣して「ビートリッキス」を葬り時に手向の花を怠らざりしとぞ。

「ビートリッキス」が其同胞に對するの愛心元より普通ならず、以て女子の鑑となすべし、然れども彼の「ルーシナ」が其親友に對するの愛憐に至りては、余等實に同情に堪へざるなり、此事の西人の談話中に操返さるゝも亦故ありと云ふ可し。此事は西暦第三世紀に當りて「ローマ」にありし事なれど、近く十六世紀の中頃英國にありて、如斯行をせし人ありき、之れ即ち「マーガレット、ローペル」夫人なりとす。

夫人は「ヘンリー」八世の朝に立ちて、才德倶絕の好政家として世に知られたる「サー、トマス、モーア」が愛女なりき。(「サー、トマス、モーア」は「ヘンリー」八世の時「ウルゲー」の後を受けて「ロード、チヤンセロル」となれり)抑も「ロード、チヤンセロル」の官位たる容易のものにあらず、王權に次ぐべき權柄は該官有にして、國政大小となく悉く其關する所なりければ、「モーア」が當時の富貴は想像の外にありと云ふも敢て過大の言にはあらじ、加之「モーア」は宗教(ローマ教)を信ずると厚く、敬虔にして禮義を重じ、活潑なる理想を有せしかば、(其著書「ユートピア」を見ても知る可し)人の好遇を得たり。「モーア」は其父母を敬ふと甚だしく、己れは「ロード、チヤンセロル」の高

位高官にあり乍ら、僅に一裁判官たる其父「ジョン、モーア」の前にありては、謹嚴己を正ふして只其意に悖らざらんとを期せり、若し途上父と相遇ふとあらば必ず膝を屈し、頭を低ふして、敬禮せざるとなかりき。又彼れは其子に對しても一擧一動亂にせず、元より世の頑迷なる父母が其子少し許りの過ちあれば直ちに之れを鞭ち、之れを叱して其再び過をなさゞらんとは、却て教ゆるなきが如くならず、彼れは自ら子供の愛慕と信仰を得、親子間の情を温かにし、而も能く其相互の責任を重ずるに至らしめんとを切望したり、如斯の家庭にして平和ならずんば、何處にか之れを求めん、實に「モーア」が家庭は余輩の理想に近きものなりしなり。「モーア」はかくも温なる家庭に四子――「マーガレット」、「エリザベス」、「シセリー」、「ジョン」を有したり、然るに不幸にも其最愛の妻は幼稚なる四子を遺して彼れに先てり、「モーア」は子供のためにとて、「アリス、ミッドルトン」と云へる寡を娶りぬ、後妻「アリス」は「マーガレット」と呼べる一人の女兒を伴ひたり、其後彼れは「マーガレット、ギッグス」なる一孤女を養ひたりしかば、今は多くの家内と共に、「チエルシー」の第宅に住えり。此「チエルシー」の第宅と云へるは「テームス」河の清流に沿ひて夏は涼しく、冬暖かなる大厦にして、時の學者、賢人の足跡絶へざる處なりき、國王「ヘンリー」八世の如きも輕舟に掉して此邸を訪ひ、「モーア」と共に神學を談じ、天文の事を討論するも屢なりき。「モーア」が女兒は早く婚し、其夫と共に此第宅に住へり、「マーガレット」が夫は「モーア」が殊に愛せし「ウイリヤム、ローペル」とて有名なる青年法學者なりき。有名なる畫師「ホルベン」が筆によりて、此快しき家庭の有様は余等にまでも、達するを得たれど、此家庭の樂の長く續く能はざりしぞ遺恨なる。

此時に當りて「ヘンリー」八世が其「アラゴン」の「カザリン」と結婚せし事の不法ならざるや否やの疑問起り「モーア」は王が「ローマ」法王の許可なくして「カザリン」を離縁せんとの決心あるを見て、心自ら安ずる能はず、即ち「ロード、チヤンセロル」を辭するに至りぬ「モーア」閑を得て讀書に耽り居たりしが、國王はやがて「カザリン」を離婚し、其侍女「アーン、ブーリン」を以て之れに代ゆるに至つて、彼れを「ブーリン」が女皇即位式に招き、且つ該式に列せんがため衣服等の用意のためにとて金二十ポンド（大凡我二百圓に當る）を送れり、彼れは王及び女王の意に違ふの其身に危きを知りしと雖ども、良心の命ずる處は背し難くして、此賜を受けざりしが、果せる哉、此時より彼は無實の罪により屢々足を法庭に運ばさるゝに至ぬ。終に彼れは「ケント」の老婦と呼ばるゝ半狂人と何事をか約束し、又王に對して暴言を極めたれば反逆人なりとて訴へられたり、此事たるや元より無實の事なりし故「モーア」は自ら其死期の至れるを知り、大膽なる覺悟を以て王の前に出たり、彼れは王を愛し、王の性情を知りたりしかば、種々の感慨胸に浮みしが、其信ずる處を主張して動かず王との議論も漸く終りて心中愉快の念に充されつゝ、「テームス」の流を下り「チエルシー」の第に歸りぬ。此間「ローペル」は父の歸りを待ち兼て、河岸に出立ち上流の方のみ望み居たりしが、「モーア」が滿面喜色に溢れつゝ、上陸するを見て覺えず「父上よ、御顏色最と美はしく在し玉ふ、事の都合善かりしにや」「さなり、ウイリヤム、我がために神に謝せ」「然らば父上には王の許を得て無罪となり給ひしか」「否な、我は最早一歩も退く能はざれば斯く樂しきなり」「モーア」は其胸中に湧き來りし凡ての感情と誘惑に打ち勝て、男子としては最早一歩も退く能はざる程、己が信ずる處を王の面前に固持したる事を意味して、此答を

なせり。此後「モーア」は愉快に充ちて閑日月を送りたり、一日愛女「マーガレット」來りて、父に對する訴への廢棄せられたる由を告げたる事ありしが、彼は靜かに「否な否な、愛女よ、そは廢棄せられたるにはあらで中休みせられたるのみ」と答へたり、如斯彼れが心中は已に死を待ちけるが、只其家族の悲の甚しからんことを憂ひて、如何にもして之れを救はんと企て居たり。

一千五百三十四年四月十三日、彼は「ラムベス」に到り國王は英國敎會の頭にして法王は英國に於て少しの權利だに有せざることを誓ふべし、と命ぜられぬ。彼れは即ち死期の果して來れるを知り、先づ敎會に至りて神を拜し、其家を出づるに當り、人間の弱點たる妻子の愛に惑はされんことを恐れ、家族が例の如く河岸まで來りて温かなる接吻をなさんと願ふをも許さず、只其「ローペル」の從ふを許せり、彼れは「ローペル」に向ひて、「我神に謝せざる可からず、我は已に死に勝てり」と曰へり。實に然り、彼れ「テームス」河に浮みて其家に最後の別を告げし時は眼に涙をたゝへ、其温なりし家庭の有樣を思ひ起し、其手づから植置きし樹木の茂れる樣を見て、情緒の亂れ甚しきを覺へざりしなるべしと雖も、彼れが理性は能く其感情に勝つを得たり。彼れは「ラムベス」に到り、法官の前に立ちて、英國の安然に關する條下は悉く之れを誓へり、然れど國王を以て敎會首となすの條に至りては、斷乎として之れに抵抗せり、此處に於て「モーア」は「ウエストミスター」の方丈の下に預人たる事四日、終に「ロンドン」獄に送られけり。彼れは牢獄にあるも正義を守りし身の露ばかり憂ふる事なかりしが、夫の精神を知らず、亂に富貴を慕へる其妻は彼れが王の寵愛を受け、天下に稱揚せらるべき位地にあり乍ら、堅くるしき理屈を云ひ張りて罪人の待遇を受くるの愚を嘲り笑へり、されど「ア

リス」は元より「モーア」を愛すると深く、其夫のためには頭の飾は勿論、衣服の不自由さへも堪へ忍びて幾分なりとも夫の心安からん事を計れり。然れど「モーア」が獄中にての最大の樂は愛女「マーガレット」の訪問と書簡なりき、之れ彼女は父が捨生主義の精神を能く悟りたればなり。此年の七月一日、「モーア」は其豫望に叶ひて「ウエストミニストル、ホール」に於て死刑の宣告を受けぬ。「モーア」獄に歸らんとて「テームス」を下るや「マーガレット」は岸邊に立ちつゝ、父に此世の別を告んとて待ち居たりしが、彼れが舟より上るを見て、情禁ずる能はず、鋭き武器を携へたる守兵等を押し除けつゝ、其側に寄り、兩手を其頸に掛けて、喫吻せり、されど彼女は何事をも云ふ能はず只涙にむせびて「チ、父上よ、父上よ……チ、父上よ」と叫びしのみなり、父は靜かに彼女を戒めて如何に苦しみ、悲むとも天意のある處、詮方もなし、忍びて天にて再會の日を待て、と説き且つ彼女の上に永く神の恩惠のあらんとを祈りぬ、斯くて父子は別れけるが「マーガレット」は情火滅し難く、今は人目等を憚るの時にあらず、後振り向きて一直線に父の側に走せ寄り、其肩にすがり、幾度となく喫吻しつゝ、前後を忘れて泣き伏したり——守兵等如何に剛情なりとも、此狀態を見ては何んぞ同情の念なかるべき、彼等も貰ひ泣に、眼を濕せり。親子の情は何時までも失すべくにあらねど、守兵の急き立つれば止むなく、別れ難き別をなしぬ。

此後父子再會する事なかりしが、「モーア」は其斷頭臺に上るの前夜、木炭の切にて一書を認め之れを「マーガレット」に送れり、其一節に

我は汝が生れ落しより今日に至るまで長の年月の間になしゝ多くの善行中にても、殊に汝が訣別の喫吻と、親を念ふの情人目を顧みるの暇なかりし行を喜

ぶなり、

と曰へり、尙彼れは其臨終の時も愛女が身の上を思ひて止ざりき。嗚呼忠信の士、愛國の人も「ヘンリー」一たび色に迷ひて、空しく斷頭臺下の露と消ゆるの運命に甘んぜざるを得ざりし乎。

「モーア」が屍は家族に歸され、彼れ自ら備へ置きしチエルシー」の墓地に葬られたれど、其頭は「ロンドン」橋上に於て梟首せられ、彼れが温雅にして慈悲を表はせし容貌、少しく變じて多少凄氣を帶びたり「マーガレット」之れを見て忍ぶ能はず、即ち此首を取り去らんと決心せり、彼れは如何なる工夫を運らせしや知るに由なけれど、後數日を經て、橋上首を見ずなりけるが、「ローベル」夫人首を取り去れり、との風說、盛に行はるゝに至りぬ、暫くにして政府の聞く處となり、「マーガレット」は法庭に送られたり。彼女法庭にありて更に恐るゝ氣はいなく、斷然として其自ら父の首を盜み取りて有せるとを自白せり、彼れは反逆者の名を以て殺されたるものゝ首を盜み、之を陰し居るとを法官の前に明に物語しなり、實に彼れが父に對する愛情は刑罰を恐れて虛言をなすを許さゞりしなり、然れども「ヘンリー」八世も一個の木强漢にあらず、「マーガレット」が愛にや折れけん、其心情を察して彼女を無罪となしゝのみならず、其陰し有る父の首をさへも與へぬ。

彼れは大に喜び此首を木乃伊となして、其行く處必ず之れを携へざるなかりしが、九ヶ年の後（一千五百四十四年）終に此世を去り、此首は「カンターベリー」なる「聖ダンスタン」寺院內「ローベル」家代々の墓地に、彼女の屍と共に葬られたり。

嗚呼「マーガレット」が處行の如きは孔夫子が曾て戒め玉ひし、「父母在さば厚く事へて敬を主とし、父母亡れ玉はゞ厚く葬りて禮に依るべし、」と云へる敎に叶へるものと云ふ可し、又「モーア」が家庭の如きは眞に「善き兒は善き親の子」と云へる俚言を摘應すべきの家庭なりと云ふ可し。

此物語を草し終り、「グラス」窓を通して大空を望めば十三夜の月老榎の枝間に氷りて、四隣何となく寂莫、諸君若し之れを讀みて、幾分にても心當りせらるゝとあらば、實にこそ余の幸なれ。（粲櫻生白）

歌苑

殘雪　（美作 なみ生）
春きても深山の松の下かげに猶きへのこるこその白雪

春氷　（同 人）
日影さすかたへはさけて地の面にむら〳〵殘る春のうすらい

鶯　（同 人）
我庭に咲きつる梅さもろさもに匂ひきてたる鶯のこゑ
のさかなる彌生のあした我庭に入まちかほに鶯のなく　（北海道上磯篠崎登美子）

探梅　（同 人）
探り來し甲斐はありけり山寺の日向に咲きし梅の一枝

北海道の冬　（同 人）
まばらなる人の住家もかくれ晃雪より外は見ろ者もなし

雨中鶯　（村瀬のぶ子）
雨の日の其つれ〳〵に嬉敷はのき端に近き鶯のこへ

殘雪　（同 人）
梅もさき柳ももゆろ庭の面にいつまで雪や殘るなるらん

柳風になびく　（同 人）
吹がまゝになびくを見れは青柳も風にはいさどむつま敷哉

太田道灌　（同 人）
賤女かさゝげし花の一枝より千々の言葉をのこす君哉

家庭雜誌を　（同 人）
言の葉の道たどろ身は朝夕に杖さ賴むは此外にこそ

霞　（陸奥 小野修子）
雲井舞ふ鶴の羽風もにほはせて幾世めでたき初霞かな

雪中子日　（同 人）
去年かけて積りし雪や色そへん今日の子の日の小松引手に

都立春　（同 人）
初春をこさぼくこゝのうらゝかに大内山の朝霞かな

新年雪　（陸奥 田中安子）
敷島のやまさ心やさよさしの御代も榮ヱてつろも白雪

元始祭　（同 人）
明らけく治まる御代やうちそさもひさつになびく民の豐さ

鷹狩　（ 人）
立鳥の羽風を寒みこのさゝに雪をわけつゝいさむ狩人

立春雲　（同 人）
四方の山雲の行手ののさかにてひなもひさつに春や立らむ

餘寒　（東京 酒井恭子）
けふもまたゆきけのくものそら冴ていつまで春はふゆこもろらん

餘寒雪　（同 人）
春さ思ふ心ゆるひにふろゆきのふゆにもましてさむけかりけり

草漸青　（同 人）
數ならぬ庭の志はふも春の日のめくみこもれぬ色はみえけり

農夫　（同 人）
せさのはた門田のいれの手つくりにたろなしりてや世を過こすらん

ひと日親しうすなる友のとひきて今かく
思ひよりつるはと紙に書て出すをみれば　（同 人）
なつかしき梅のかをりをさめくれは契りし友のすみかなりけり
とありければ返しとはなけれど取あへず
蕩らすは風のたよりもさはさらんひさのこゝろは花にさりけり

山路さくら　（永田みづほ）
みやま路にのさけくにほふ櫻花ちりのならひにもれもやはすろ

水邊落花二首 (同 人)

なか〳〵にちれどあはれや淺からむ下ゆく水にあとをとめねば
風にちる花の心をしらればや下ゆく水のさそひゆくらむ

めぐみ深き人のみまかられけるをとひいでゝよめる (同 人)

君がおきしめぐみの露もあだなれや墨染衣ひぢまさりつゝ
きみがおきしめぐの露のむすぼれて日頃は袖の涙なりけり

海路霞 (同 人)

海士がこぐなれし船路も春くれば舳にもともにも霞たちつゝ

田家櫻 (同 人)

さすがに春にはもれぬあぜざくら里の翁も老やわすれむ

遠山暮雪二首 (柳湖 大橋尙保)

入相の鐘の響にをさつれて安土の峯にふれる白雪
滋賀の浦打いて見れは遠山に花そ咲ける雪の夕暮

野若菜 (小林忠吉)

はる雨に小草のみどりもつまてやゝ靑み行野邊の色かな

若菜摘 (同 人)

思ふどち袖ふりはつて靑霞かすむ野末につむわかな哉

春の野遊 (水田みつほ)

一、まどのあたりの夢さめて
　いづこもかをる春風に
　舞の姿のおもしろく
　ま垣をこえてさぶてふは
　いづこの野邊にゆくならむ

二、いざやをさな子なれもゆけ
　したしきなどうちむれて
　心のどかにあそぶべし
　朝日のぼりぬ今ぞ今
　すみれの露もにほふらむ

三、學のにはにきのふけふ
　覺えし春の唱歌をば
　花の木かげに試みよ

　霞のおくに鶯も
　聲をあはせてうたふらむ

四、足つかれなば若草の
　綠の床に足のべて
　蕾筆をとるもよかりなむ
　氷とけにし野川には
　魚も喜びおどるらむ

五、さはさりながら白雲と
　まがふ櫻もくれそめて
　鳥もねぐらにいそぎなば
　なれも返りて母上に
　けふのたのしさ語れかし」

寄山祝 (同 人)

君が代は千代もかわらしみちのくの末の松山浪こゆるとも

初春 (攝津池田盥川逵)

明渡る峰に雪氣の雲消てそらもみどりに霞みそめたり

早春二首 (同 人)

ふる年の雪を埋みて山の端のかすむは春の來る成けり
草も木も同しみどりに立かへる春とし聞は長閑かりけり

春霞 (同 人)

三吉野の山は霞のたちこめて見へぬ梢の花やまたるゝ

摘若菜 (攝津池田盥川歌子)

乙女子は袖ふりはへて春の野の雪間に出る若菜つむ覽

早春霞 (同 人)

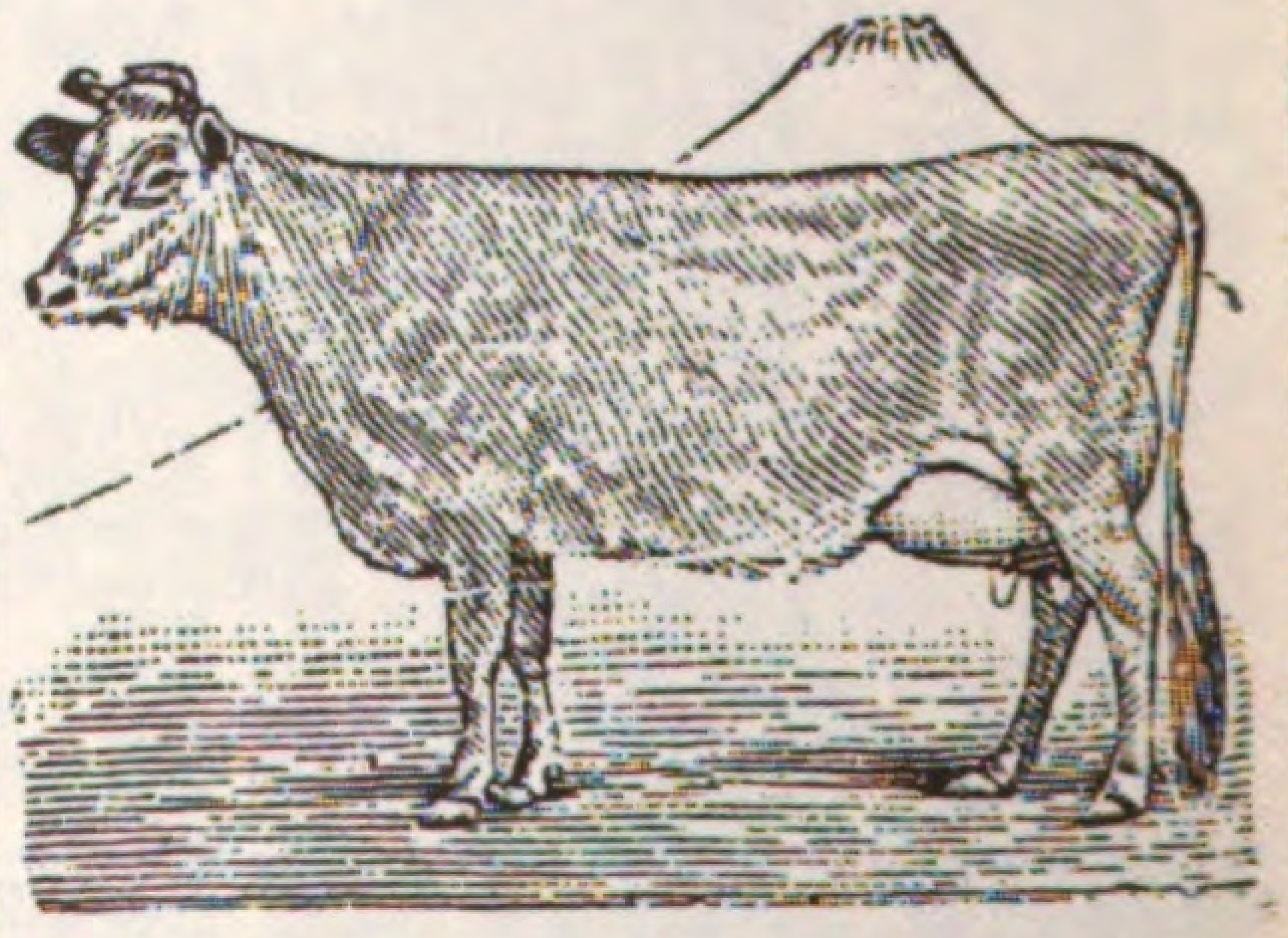
今朝見れは山も霞の立そめて心のどけき春は來にけり

春霞 (同 人)

のどかなる春の山邊を見渡せは霞て見へす峰の松原

隔戀 (同 人)

きみとわれとのうちとけし
心のおくはみへながら
へだつる雲ぞつれもなき」
そなたの空のかたみとし
ながめむ月のかげさへも
なほ雲ゆゑにかくれけり



家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎

編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

平田久著

露西亞帝國

紙數　四百七十三頁
定價　卅五錢　郵稅六錢
肖像　露帝ニコラス二世
地圖　露西亞の膨脹
　　　中央亞細亞の進畧
　　　パミール高原
　　　悉比利亞鐵道

各新聞の批評

◎●●時事●●●　著者の言獎に曰く今日の時勢に於て露西亞の事情を知るは日本の事情を知る所以にして之を學ぶは學問の爲めにあらず實に我等生活の必要に因れりと即ち此書は能く時勢に應じて著はしたるものと云ふべし著者は平田久氏なり

◎教育時論　四百五十六頁の大冊子、是れ平田久氏が露西亞帝國研究の隙迻吳廣たらんとを期して、著したるもの。地理あり、歷史あり、國民の特質あり、日本國民の心得として必一讀すべく、將來露西亞帝國研究の途に上らんと欲するものも、讀んで以て其方針を確定すべし。

◎●●毎日　東洋に事多く、遂に露西亞が東洋の政治舞臺に其腕を振はんとする傾向あるに至りしより、露國のとを談論するもの、著述するもの少しとせず。然れども始終相應し所論確實なるもの、所謂完成の著述未だ世に公にせられしとなし。然るに頃日民友社員平田氏の著述にかゝる「露西亞帝國」てふ大冊(四百七十三頁)出で、漸くこの感去る、可喜可喜。」今まこの「露西亞帝國」を閲するに、露西亞……の諸問題に就き頗る叮嚀に論辯されぬ。文章の美、徵證の周到なるには感服の外なし。著者がこの大文字をものせんとて費されし研究考證の勞は定めて容易ならざりしならん。ベルカン、印度、朝鮮問題に付き著者の論述されしうちには(六六ページより三〇三まで)、露國に於て曾て耳にするとを得ざるを多く甚面白し、且つ最も有益ならん云々

◎●●●●基督教新聞　筆を露西亞の天然に起し其膨脹力、同化力を說きて國民に及び卷頭新帝尼格第二世を總論として掲げ附るに肖像を以てし卷中露西亞膨脹地圖中央亞細亞侵略地圖「パミール」高原地圖悉比利亞貫通大鐵道地圖を挿む全篇四百五十六頁章を別ち節を立つる頗る詳材料の豐富なる優に推して近來の好著と謂ふべし云々

◎●●●●●神戸實業新聞　露西亞てふ名稱は今や我が國人に一種言ふ可らざる感情を惹起し對露西亞策なる者は實に我邦朝野の間に於ける最大至重の問題となり將來に於て我が帝國の國是方鍼を一定するは一に此問題の解釋に待たざる可らず左れど今若し對露西亞策を講ぜんと欲せば須らく露西亞の以て露西亞たる眞相を知るとを要す……『露西亞帝國』の著者は能く時勢の須要を察し奮ふてこの知り難き露西亞帝國の眞相を究めて之を我が國人に紹介せんことを試み而して又能くその目的を達したると言ふことを得べし……憶ふにその材料の拾收撰擇は是れ著者が最も苦心を用ひたる所なるべく文章流麗布置亦その當を失はず就中露西亞國民を論ずるの一篇五章は當時佛國經濟學者の泰斗たるポール、ルロアー、ボーリウの同胞にして最も露西亞の形勢事情に精通せるを以て其名聲歐洲諸學者の間に籍甚なるアナトー、ルロアー、ボーリウ氏の原著を露人ラコジン氏が飜譯評註したる『ザール帝國及び露西亞國民』に本きてこの奇怪不可思議なる露西亞國民の性質、氣風、素養、慣習を說明して最もその詳を極む全文の光彩實にこの一篇に在り云々

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行